恭翁運良の活動と曹洞宗（下）

―加賀大乗寺と瑩山紹瑾を踏まえて―

佐藤秀孝

風貌と人となり

行状…其為レ人也、面目厳凛、有二御史之風一也。近而依レ之、風韻洒然、如二旱天霖一、感レ人深矣。

行実…其為レ人也、面目厳凛、有二御史之風一。近而依レ之、風韻洒然、如二旱天霖一、感レ人深矣。

塔銘…大凡若下道契二主臣一、行感二神鬼一、青鷹兆レ夢、白鷺随上レ行、可レ謂解慧三昧者也。且夫師資叮嘱賓主酬対、及生平禅坐経行之偈頌、挙足下足、靡レ不二仏法規範一。人事警策矣、今不レ贅レ焉、悉見二於本山行実一。昭々若二懸レ鏡以照レ物矣。

扶桑
延宝
本朝
大乗

では、恭翁運良という人はそもそも如何なる風貌を有していたのか、さらにその平生の人となりとはどのようなものであったのか、こうした点について伝記史料に記される内容を窺って整理してみることにしたい。

「行状」や「行実」には運良の風貌と人となりについて、

其れ人と為りや、面目厳凛として、御史の風有り。近づきて之れに依れば、風韻洒然として、旱天の霖の如く、人を感ずること深し。

と伝えている。はじめに運良のありようを「面目厳凛」であったと表現しているが、面目とは顔つきや容姿のことであり、厳凛とは厳も凛もきびしいさまであるから、運良が身の引き締まる厳かな威光を持ち合わせた人物であったことを語っている。しかもその厳峻な面目から運良には「御史の風」があったとされるが、御史とは官吏の不正をあばいて取り調べる官のことであるから、禅の叢林でいえば修行僧はもちろんのこと、知事・頭首などの役職にある者に対してもその懈怠や破戒を厳正に取り締まる堂頭あるいは師家ということになり、運良は常に不正や悪行を許さない厳格な立場を貫く人であったものらしい。(1)

しかし、その反面、運良に近づき接してみると、その人柄

は少しもわだかまりがなくさっぱりしており、あたかも日照りに雨が降り注いだかのように多くの人々に感銘を与えたとされる。風韻とは気高い人柄、雅やかな趣をいい、洒然とは汚れやわだかまりがなく、さっぱりしているさまをいう。いわば、運良は容易に近づきがたい威厳を備えていながら、その実は温かい慈悲の念に満ちた人であったと表現されているわけである。人々の運良に寄せる思いには、まったく相反するかのごとき二面が存したのであり、厳峻にして妥協を許さない潔癖さと、人々に対する慈愛に満ちた温容さには、あたかも運良が好んで画いた不動明王のごときものが存したのではなかろうか。

つぎに「塔銘」において華嶽建胄が記す内容であるが、建胄は運良が示寂して一世紀以上を隔てた人であるから、その評価にはすでに建胄の当時における運良に対する祖師としての要請が働いているものと見られる。ともあれ、建胄は運良について、

大凡そ道の王臣に契い、行の神鬼を感じ、青鷹の夢に兆し、白鷺の行くに随うが若きは、謂つべし、解慧三昧の者なりと。且つ夫れ師資叮嘱し、賓主酬対し、及び生平の禅坐経行の偈頌、挙足下足、仏法の規範にあらざるは靡し。人事の警策は今ま焉に贅らず、悉く本山の行実に見ゆ。昭々たること鏡を懸けて以て物を照らすが若し。

とそのありようを記し讃えている。もっとも、この部分は「瑞応山伝燈護国寺開山恭翁和尚塔銘」では若干ながら字句の相違が見られ、

凡道契二王臣一、行感二神鬼一、青鷹夢兆、白鷺馴行、件々異迹。及師資叮嘱、賓主酬対、生平禅余、遊戯製作、挙足下足、靡レ不二仏法規範一。人事警策者、悉見二于本山行実一。昭々如二懸レ鏡以照レ物也。

と表現されている。いずれにせよ、この記述はまさに運良についてその生涯の事跡と接化のありようを語ったものにほかならない。そこで以下、この建胄が語る内容を逐一に検討してみることにしたい。

冒頭にある「道は王臣に契う」というのは、運良の道風が鎌倉末期から南北朝動乱の時世に王侯貴族や武士に慕われたことをいうのであろうか。ただし、具体的に運良が生前に朝廷や幕府などから如何なる帰崇を受けていたのかは「塔銘」でも明確にされておらず、「行状」や「行実」でも窺うことができない。したがって、運良が具体的に如何なる王臣の帰依を得たのかは定かでない。後代の史料では運良と後醍醐天皇との関わりを示す記載も存しているが、(2)伝記史料その他の古い文献ではこの点は明確でない。

また「行は神鬼を感ず」というのは、運良の日頃の行動が

きわめて神出鬼没で自由自在であったことをいうのであろうか。おそらくはすでに触れたごとく運良には神異僧としての一面が濃厚に窺われるわけであるから、そうした多くの神通力や神変を現じたことを強調したものであろう。[3] つぎに「青鷹は夢に兆す」というのは、運良が大乗寺に到る前日に瑩山紹瑾が山門の上に青鷹の集まる夢を見たという因縁を指しており、これを縁に紹瑾より大乗寺を任されて住持として化導をなした消息を語るものであろう。さらに「白鷺は行くに随う」とあるのは、運良が野行するときに一群の鷺が常に随行したという逸話を示しており、その他の運良にまつわる数多くの神変をも内に含んだ表現と見てよい。しかも、建胄はそうした事跡がすべて運良の解慧三昧であったと記しているが、解慧とは智慧のことであり、三昧は禅定のことであるから、[4] これらすべてが運良の智慧のはたらきであり、坐禅修道の力の賜物であったと解していることになろう。

また「且つ夫れ師資叮嘱し、賓主酬対し、及び生平の禅坐経行の偈頌、挙足下足、仏法の規範にあらざるは靡し」と表現されているが、運良の席下においては師と弟子が何度も念を押して説示し、賓客と主人が綿密に問答を応酬したとされ、学人との間で親密な商量が展開されていたことを伝えている。日常に行なった坐禅や経行および日々になした偈頌など、運良の起居動作のすべてが仏法の規範に契っていたとされ、運良の席下では厳格な禅宗叢林の威儀が保たれていたことを伝えている。[5]

さらに「人事の警策は、今ま焉に贅らず、悉く本山の行実に見ゆ。昭々たること鏡を懸けて以て物を照らすが若し」とあるが、人事の警策とは人々のためになした策励のあとかたのことであり、[6]「塔銘」では運良のそうした事跡はすべて本山興化寺の「行実」に載せられているから、改めて載せていないことを明記している。ここにいう「行実」とは、興化寺の「行状」ないし後に伝燈寺に残された「行実」に載る内容のことを指しているものと見られる。

伝燈寺保存会編『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「第三章、美術・工芸資料」には、伝燈寺に所蔵される運良の頂相および木像が載せられている。運良の頂相は左斜めを向き、法衣に袈裟を着し、右手に払子を執り、法被を掛けた曲禄に坐している姿である。この頂相は運良が示寂して三〇〇年ほどを経た江戸初期のものとされるが、おそらく往時に画かれた運良の頂相を踏まえて複写された画像と見られ、個性的な気骨のある顔貌が特徴的である。[7]

また伝燈寺にまつられる運良の開山木像は法衣に袈裟を着し、禅定印を結び趺坐している姿であり、細目の顔に小さな眼、こけた頬や口元の皺など穏やかな中にも気骨ある老相に表わされている。これも江戸前期の作と見られているが、そ

れ以前の古い木像を基にして運良のすがたを刻んでいるものであろうから、運良の生前のすがたを髣髴しているはずである。[8] 運良晩年のすがたを刻んだものであろうが、気丈な威厳に満ちた人柄が偲ばれる坐像である。

このように伝燈寺には運良のすがたを描いた頂相とすがたを刻んだ木像の二つが現今に残されているのであり、これらによって我々は往古の運良の顔貌や威厳に満ちたありようを直に仰ぐことができるのである。頂相や木像に見る運良の容姿は、まさに「行状」「行実」に語られるところを裏付けるものであり、寺運の盛衰の中で稀有にして現存している事実を喜びたい。

語録と著述

行状…欲下昭二示後来一、使中仏祖法眼不上滅、故有二正法眼蔵之語一。禅戒正伝破二佗邪網一、故有二血脈相承之訣一。愛レ人及レ物等レ之以レ慈、故有二仮名見性鈔一。怒罵嬉笑莫レ非二仏事一、故有二種々法語一。

行実…欲下昭二示後来一、使中仏祖法眼不上滅、故有二正法眼蔵語一。禅戒正伝破二佗邪網一、故有二血脈相承訣一。愛レ人及レ物等レ之以レ慈、故有二仮名見性抄一。怒罵嬉笑莫レ非二仏事一、故有二種々法語一。

塔銘

扶桑…其見二于著述一、有二正法眼蔵語・禅戒正伝血脈相承説・仮名見性抄并語録若干巻一。

延宝…有二正法眼蔵語若干巻一。

本朝…所レ著述作、有二正法眼蔵語・禅戒正伝血脈相承説・見性鈔并語録若干巻一。

大乗

では、運良には如何なる語録や著述の類いが存したであろうか、つぎにこの点について伝記史料の内容を整理しておきたい。今日、残念ながら運良に関する語録や著作の類いはそのゆかりの伝燈寺などにも伝えられていない。しかし、「行状」「行実」や燈史・僧伝によると、運良には語録とともに『正法眼蔵語』『禅戒正伝血脈相承説』『仮名見性鈔』といった著述が存したことが伝えられている。

この点については駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』にもそれぞれ運良の語録・著述として、

恭翁運良和尚語録　②若干巻　③恭翁運良　⑥高僧伝
見性鈔　③恭翁運良　⑥高僧伝　⑦扶桑僧伝作仮名見性鈔
正法眼蔵語　③恭翁運良　⑥高僧伝、延宝録
禅戒正伝血脈相承説　③恭翁運良　⑥高僧伝、扶桑僧伝

と載せられており、[9] これを受ける『国書総目録』にても、

見性鈔　けんしょうしょう　(類)禅宗　(著)恭翁運良　＊

新纂禅籍目録による

正法眼蔵語　しょうぼうげんぞうご　（類）曹洞　（著）恭翁運良　＊新纂禅籍目録による

禅戒正伝血脈相承説　ぜんかいしょうでんけちみゃくそうじょうせつ　（別）血脈相承説　（類）禅宗　（著）恭翁運良

＊新纂禅籍目録による

と記されている。[10] これらによれば、少なくとも運良には語録が編纂され、それとともに三点の著述が別に存したことが判明する。ただし、現在のところ、これらの禅籍はいずれも残念ながらその所在が確認されておらず、内容が如何なるものであったかは定かでない。ともあれ、ここでは運良に関するそれぞれの禅籍について、現状における若干の考察を試みておきたい。

運良の語録については「行状」や「行実」はその存在を伝えないものの、『扶桑禅林僧宝伝』や『本朝高僧伝』が明確に記していることから、おそらくこうした僧伝が編纂された江戸初期までは何らかのかたちで運良の語録の類いが伝存していたものと見られる。ただ、いずれも若干巻とあるのみで、具体的にその冊数や巻数がどれほどであったのかは記されていないことから、おそらくそれほど大部のものではなかったと推測される。また表題についてもおそらく『新纂禅籍目録』が記すような『恭翁運良和尚語録』であったとするよりは、古くは『恭翁和尚語録』とあり、また後には『仏林恵日禅師語録』といった題号でまとめられていたのではなかろうか。

ともかく運良の語録はおそらく加賀の大乗寺開堂にはじまり、加賀の伝燈寺や越中の興化寺など歴住した諸寺における上堂・小参・法語などが載せられ、さらに修行期以来の真賛・偈頌その他が収められていたはずであろう。とくに初開堂の大乗寺における記載には運良と当時の曹洞宗との関わりも濃厚に窺え、運良に参じた曹洞禅者の消息なども細かに判明したことであろうし、運良が大乗寺を退住していく過程なども知ることが可能であったはずである。また伝燈寺に入院してより以降の語録には、曹洞宗との関わりを振り切って後、運良が如何なる活動をなしたのかも明確に記されていたものと思われる。したがって、その語録が散逸して今日に伝えられていないのは、単に運良個人の事跡を詳細に辿れないばかりでなく、北陸において法燈派と曹洞宗の禅者がなした交流と対峙の歴史を窺う上でもきわめて惜しまれよう。

つぎに『正法眼蔵語』については「行状」や「行実」に、

後来に昭示し、仏祖の法眼を滅せざらしめんと欲す、故に正法眼蔵之語有り。

と記されており、運良が仏祖の法眼が断絶しないようにとの配慮から後世の学人のために明示したものが『正法眼蔵語』であったとされている。とくに『新纂禅籍目録』においては

運良の『正法眼蔵語』を道元の『正法眼蔵』の末疏の一つとして扱っており、もし明確に『正法眼蔵』の末疏であるならば、道元の直弟であった京都永興寺の詮慧が記した『正法眼蔵聴書』やその弟子の経豪がまとめた『正法眼蔵抄』さらに永平寺中興第五世となった寂円派の義雲（一二五三―一三三三）が編集した『正法眼蔵品目頌』などに次ぐ古註ということになり[11]、しかも臨済禅者による参究としても注目すべきものがあろう。この点、『新纂禅籍目録』には運良の『正法眼蔵語』とともに瑩山紹瑾の著述として、

正法眼蔵語　②一巻　③瑩山紹瑾　⑥高僧伝二四　⑦常済大師御伝記デハ秘密正法眼蔵ノコトデナイカト記ス、同書参照

とあり、これを受ける『国書総目録』にも、運良の『正法眼蔵語』とともに、

正法眼蔵語　しょうぼうげんぞうご　一巻　（類）曹洞　（著）瑩山紹瑾　＊新纂禅籍目録による

という記載が存している[12]。その真偽は定かでないが、紹瑾と運良がきわめて親密な道交をなしているだけに、同じく『正法眼蔵語』という著述が存したとされるのは興味深いものがあろう。ただし、紹瑾の『正法眼蔵語』については現存する『秘密正法眼蔵』のことを指しているのではないかとも推測されている。

さらに『禅戒正伝血脈相承説』は単に『血脈相承説』あるいは『血脈相承之訣』とも略称されているが、これについても「行状」や「行実」には、

禅戒、正伝して佗の邪網を破る、故に血脈相承之訣有り。

と記されており、運良が仏祖正伝の禅戒を示すことで他の邪網を破らんとして血脈相承の訣を残したのだと伝えている。邪網とはよこしまなものの考え、邪法・邪解のことであるから、血脈相承した正伝の禅戒のありようを人々に説示し、誤った見解を打破せんとした著述ということになろう。仏祖正伝の禅家の戒法が血脈として相承しているという発想からしても、曹洞宗の影響を濃厚に受けた内容であったものと推測され、禅戒ということばが明確に記されている点でも注目すべきであろう[13]。

また、いま一つの『仮名見性鈔』は単に『見性鈔』または『見性抄』とも略称されているが、これについても「行状」や「行実」には、

人を愛し物に及び、之れに等しきに慈を以てす、故に仮名見性鈔有り。

と伝えており、運良が一切衆生に対して深い慈悲の念を持っていたが故に『仮名見性鈔』を著したとしていて、仮名の注釈でより一般の在俗の徒に分かりやすい接化を目指したことが察せられる。この『仮名見性鈔』についても、道元に擬せられる偽撰の『永平開山仮名見性抄』（一般には『永平開山道

元和尚仮名法語』）との関わりも推測されるが、[14] いずれにせよ見性悟道を説いたものであろうから、法燈派の臨済禅者としての自覚の上になされているはずであり、また臨済宗における抄物仮名資料の先駆的な存在と見られる点でも注目すべきものがあろう。[15]

このほか運良にはかなりの法語も存したものらしく、「行状」や「行実」には、

怒罵嬉笑、仏事に非らざるは莫し、故に種々の法語有り。

という表現が見られる。運良が学人に対してなした怒号や罵声、日々の嬉戯や微笑などがすべて仏法の発露であったされ、運良には折々に門下の道俗らに示した法語の類が数多く存したものらしい。しかも、語録を除いたその他の著作は状況からしてすべて仮名混じり文で示されていたものと見られ、その点では運良は積極的に人々に和語による接化をなしていたと解してよかろう。ちなみにこの点は師の無本覚心にも種々の仮名法語が伝えられており、法燈派の特徴でもあったと見られるが、こうした仮名法語による為人接化は当時としては瑩山系の曹洞宗教団における道俗接化の特徴でもあったわけであるから、運良は出家のみでなく在家の人々をも対象とする広い意味での道俗接化の手段として仮名法語を積極的に取り入れたかたちで教えを説いていたことになろう。

伝燈寺保存会によってまとめられた『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』においても、運良の著述や語録に関する記載は何ら存していないことから、すでに伝燈寺やその近隣の法燈派ゆかりの禅寺にも運良の語録や著述その他は伝存していないと見てよかろう。わずかに少林寺所蔵「伝燈寺開山恭翁和尚行実」所収の「伝燈寺文書」に、

伝燈寺開山仏林恵日禅師之真跡。

毫釐有レ差、天地懸隔。如何通。天高二東南一、地頓二西北一。為二鈍漢者一、阿可可、阿可可。

として運良が書した真蹟の写しが伝えられているにすぎない。[16]「毫釐も差有れば、天地懸かに隔たる」というのは中国禅宗の三祖僧璨（鑑智禅師、？―六〇六）ゆかりの『信心銘』のことばにちなむものであり、「天は東南に高く、地は西北に頓る」とはおそらく伝燈寺から望まれる景観を述べているものであろう。運良としては諸法実相の真実を我見によって眩ましている鈍根の者に対して戒めの一句を記しているわけである。「阿可可」とは笑い声の擬音であり、大声で笑い飛ばすさまを形容したものである。

また越中太田（いまの高岡市太田）の摩頂山国泰寺に所蔵される運良の「大日本国賀州路瑞応山伝燈禅寺開山仏林慧日禅師行状」と「越之中州黄龍山興化護国禅寺開山勅諡仏林慧日禅師塔銘并序」の末尾に、

二代和尚之自賛。

物々是仏祖、仏祖是物々、是故越二仏祖一、波光有二透路一。

同。

仏不二是仏一、心不二是心一、喚作二如変一、豈亘二古今一。

皆天正八年庚辰閏三月下澣、浩山書。

という記載が存し、運良がなしたと目される二首の自賛偈頌を伝えている。[17] ここにいう「二代和尚」とは、おそらく由良の覚心の系統の二代目という意味で運良のことを指しているものと見られる。ともに自賛であることから、この賛を付した頂相が何れかに伝えられていたものと見られるが、現今ではその所在が確認されていない。ただ、少なくとも安土桃山期の天正八年(一五八〇)三月下澣までは現存していたことが判明し、この内容を浩山という禅者が書き留めているわけである。これらの資料はもちろん運良の真蹟ではなく筆写されたものにすぎないが、数少ない運良自身のことばを伝えている点できわめて貴重な記載といえよう。

また越中の摩頂山国泰寺には南北朝期から室町初期に筆写されたと見られる絹本墨画の「東山七葉頂相宗派之図」一幅が伝えられているが、これは古く運良ゆかりの品であったとされている。「東山七葉頂相宗派之図」とは中国臨済宗祖の臨済義玄(慧照禅師、?—八六六)より楊岐派の五祖法演(東山、?—一一〇四)に至る系譜が示された後、さらに法演より開福道寧(寧道者、?—一一一三)・月庵善果(一〇七九—一一五二)・老衲祖証・月林師観(一一四三—一二一七)・無門慧開と次第し、東山第七葉に覚心が出て日本に法門が伝えられたことを祖師の頂相図としてまとめたものであり、[18] 実際に頂相として画像が描かれている祖師は「五祖演和尚」「開福寧和尚」「月菴果和尚」「老衲証和尚」「月林観和尚」「無門開和尚」「法燈心和尚」という七代にわたる臨済禅者なのである。[19]

しかも注目すべきは、後世のことながら伝燈寺中興第四世の光天覚盤(?—一七四一)が記した「七葉頂相之由来」に、

加州小坂瑞応山伝燈寺什物、東山七葉頂相之図一幅。一、伝燈寺開山仏林恵日禅師者、紀州興国寺開山法燈国師之上足ニ付、大唐無門慧開禅師ヨリ紀州法燈国師江被遣候東山七葉頂相之図、則当寺開山江御附属ニ而御座候。是則日本国ニ而一幅之図ニ而御坐候。当寺開山伝記之内ニモ有之。

とあり、この「東山七葉頂相宗派之図」は中国の慧開が日本僧の覚心に与えたものをさらに覚心が門下の上足(高弟)であった運良に授けた事実が記されている。[20] しかも従来これは伝燈寺に什物として所蔵されていたものであって、後に何らかの理由で国泰寺に移されて保管されていたことが知られる。[21] したがって、この「東山七葉頂相宗派之図」も運良が覚心より親しく伝授し、久しく伝燈寺山内に護持されてきた貴重な宝物ということになろう。[22]

示寂後の奇瑞

行状…没後、侍真蒼皇而趨、点灯供香、祖乃劈脊一棒、棒痕終身不滅。加州大野尼寺、忽罹回禄、有自画且讃観自在像、在於列焔堆裡、人以為焼失。後観之、幀子燬却、慈像并讃自若。挙衆異之。即讃曰、弘誓湛海、威徴重山、遍利悲体、同塵慈顔、天堂地獄、分身一般、乾坤内外、転生無間。半甲一鱗、応光空劫、或妃或童、垂迹乱髪、春入千林、華処々発、応物現形、如水中月、云々。奇峭之語、不学而能之、蓋非夙薫般若之力、無師自然之智、豈可企及哉。兜率尼寺、欝攸作変、地密邇于祖塔、燎焔之勢、殆不可救。乍神人数輩、頻注瓶水于猛煙、挙衆仰見。于時北風忽南、塔院無恙、所自画之不動尊像、粲然于灰燼中、遠近頂礼。及痊履之後、霊異頗多、不遑備載。今摭始末大概、具之於大手筆之草本、以欲潤色為万世之標準、与此山不磨。法孫比丘某甲謹状。

行実…没後、侍真蒼皇而趨、点灯供香、祖乃劈背一棒、棒痕終身不滅。加州大野尼寺、忽罹回禄、自画自讃観自在像、火不能焼、緇白敬異。讃曰、弘誓湛海、威徴重山、遍利悲体、同塵慈顔、天堂地獄、分身一般、乾坤内外、転生無間。半甲一鱗、応光空泪、或妃或童、垂迹乱髪、春入千林、華処々発、応物現形、如水中月。奇峭之語、不能而能則、由夙薫般若之力、無師自然之智、非世智可当。兜率尼寺、欝修作変、祖塔密迹、燎焔之勢、殆不可救。神人数輩、注瓶水於猛煙之中、挙衆仰見。于時北風忽南、塔院無恙、自画不動像、粲于灰燼中、遠近頂礼。及痊履之後、霊異之迹頗衆、不遑備載。今摭前後大略、具之於大手筆之潤色、以為万世之標準、与茲山不磨。法孫比丘某謹状。

塔銘

扶桑…加州大野寺、奉師自画大士像。寺忽罹火、而像不壊。又有兜率寺、近師之塔、偶遭回禄、勢甚急将迫於塔。一衆張皇無可奈何。俄見神人数輩注水于煙焔之上。而塔亡恙。其霊異似此者多、非筆舌所能殫記也。

延宝…嘗画大悲像製賛曰、弘誓湛海、威徴重山、遍利悲体、同塵慈顔、天堂地獄、分身一般、乾坤内外、転生無間。半甲一鱗、応光空泪、或妃或童、垂迹乱髪、春入千林、処々華発、応物現形、如水中月。納在加州大野尼寺、登後寺火、其像不焼。

本朝…良又以丹青作仏事、嘗画大悲像、自製讃辞、蔵諸賀州大野尼寺。一日寺火而像不壊、遠迹歎異。兜率回禄、火勢尋急、将逼於良之塔。俄見神人数輩注瓶水於烟焔之上、而塔無恙。異迹孔多、不遑悉記。

大乗

すでに述べたごとく運良にはその生前から神異僧としての一面が存し、多くの奇瑞の現じたことが記されていたわけであるが、伝記史料によれば、運良が暦応四年(一三四一)八月一二日に世寿七五歳で示寂して以降の消息としても、いくつかの奇瑞が起こったことを伝えている。すなわち、「行状」「行実」や燈史・僧伝によれば、運良が示寂して後のできごととして、いくつかの不可思議な逸話が残されている。いま、それらを「行状」や「行実」の記載を中心として燈史・僧伝などを踏まえて整理し、それぞれの内容を検討考察してみることにしたい。

第一に「行状」や「行実」には、

没して後、侍真、蒼皇して趨りて灯を点じ香を供するに、祖乃ち劈脊に一棒す。棒痕、終身に滅せず。

という逸話が伝えられている。これは伝燈寺における消息か興化寺における消息かが定かでないものの、運良が亡くなった後、開山堂において運良の尊像(御影木像)に給侍する侍真が慌てふためいて灯明を灯し香を供えることがあったが、このとき祖すなわち亡き運良の尊像がその侍真の背をめがけて一棒を与えたという伝承である。[23] 侍真とは禅寺の開山または祖師の真影である木像や画像に侍する侍者のことであり、主塔侍者または塔主・塔司とも称されている。[24] 毎朝、侍真は尊像に対して灯明を灯し香を供えて供養することが日課になっており、しかもあたかも生きているかのごとく鄭重に侍奉することを義務付けられている。この話は背景に常に日々の行持を蔑ろにしなかった運良の生きざまが暗に示されているといってよく、運良の門流に連なる禅者らがこのことを肝に銘ずるために記録に残されたとも解されよう。このとき運良の尊像から一撃を食らった侍真の僧は、棒に打たれた痕跡が生涯にわたり消えなかったと伝えられる。

第二に「行状」や「行実」には、

加州の大野尼寺、忽ち回禄に罹るに、自ら画き且つ讃する観自在像有り、列焔堆裡に在れば、人、焼失せりと以為えり。後に之れを観るに、幀子は燬却するも、慈像并びに讃は自若たり。衆を挙げて之れを異とす。即ち讃に曰く、弘誓は海に湛え、威徳は山よりも重し、遍刹の悲体、同塵の慈顔、天堂・地獄、身を分つこと一般なり、乾坤内外、生を無間に転ず。半甲一鱗、光を空劫に応ず、或いは妃、或いは童、迹を垂れ髪を乱し、春は千林に入り、華は処々に発し、物に応じて形を現ずること、水中の月の如し、と云々。

という逸話が伝えられている。この記事は燈史や僧伝にも継承されており、『扶桑禅林僧宝伝』にも簡略に「加州の大野寺、師の自ら画く大士像を奉ず。寺忽ち火に罹るも、而も像は壊れず」とあり、また『延宝伝燈録』では「嘗て大悲像を

画いて賛を製して曰く、弘誓は海に湛え、威徳は山よりも重し、遍刹の悲体、同塵の慈顔、天堂・地獄、身を分つこと一般なり、乾坤内外、生を無間に転ず。半甲一鱗、光を空汨に応ず、或いは妃、或いは童、迹を垂れて髪を乱し、春は千林に入り、処々に華発し、物に応じて形を現ずること、水中の月の如し、と。加州の大野尼寺に納在し、登りて後、寺火ゆるも、其の像は焼けず」として「行状」「行実」を受けて運良の賛のことばが載せられている。さらに『本朝高僧伝』においても「良、又た丹青を以て仏事と作し、嘗て大悲像を画き、自ら讃辞を製し、諸れを賀州の大野尼寺に蔵す。一日、寺火ゆるも像は壊れず、遠迹は歎異す」と記されている。

ちなみに運良が画僧としても著名であった一面については、江戸末期の書画鑑定家である檜山義慎（坦斎・磐松軒、一七七〇―一八四二）が撰した『続本朝画史』（『皇朝名画拾彙』とも）巻上にも、

恭翁運良禅師、法燈覚心法嗣、賀州伝燈寺開山。師又以丹青作仏事、嘗画大悲像、自製賛辞、蔵諸賀州大野尼寺。一日寺火而像不壊。遠邇歎異。暦応四年八月十二日、書偈而化。歳七十五。高僧伝。

としてその名が見えているが、これは内容的に『本朝高僧伝』の記載をそのままに受けるものにほかならない。[25] おそらく檜山義慎は運良の描いた書画そのものを閲覧することはなかったはずであろう。

いま「行状」「行実」や『本朝高僧伝』および『続本朝画史』の記事を整理し、画僧としての運良に関する内容を述べてみるなら、およそ以下のようになるであろう。

運良が絵画に秀で不動明王像を得意としていたことはすでに触れたわけであるが、これとともに運良は大悲像すなわち観自在菩薩像（観音像）なども好んで画いたものらしい。[26] 加賀大野の地すなわち現今の金沢市大野町に存した大野尼寺には、運良が生前に自ら画いて賛を付した観自在菩薩画像が所蔵されていたが、その絵は丹青（赤や青）の彩りが施された彩色画であったとされる。運良が示寂して後、その大野尼寺が回禄（火災）に罹る災難に遭遇し、猛火の中にあったことから、寺の尼僧ら寺内の人々は画像も焼失したであろうとあきらめていた。ところが、その後に焼けた跡を探ると、幀子すなわち張り付けた掛け軸は燃えてしまっていたものの、運良が画いた画像ならびに賛そのものはもとのまま残っていたという。ために大野尼寺の尼衆や遠近の道俗らはみなこれを奇異なできごととして後世に伝えたというものである。

実際に運良が描いた観自在菩薩画像は現今に伝えられておらず、具体的に如何なるものであったのかは定かでないが、この記事によって、

弘誓湛海、威徳重山、遍刹悲体、同塵慈顔、天堂地獄、分

身一般、乾坤内外、転二生無間一。
半甲一鱗、応二光空劫一、或妃或童、垂レ迹乱レ髪、春入二千林一、華処々発、応レ物現レ形、如二水中月一。

という数少ない運良の画像賛が知られるわけであり、これは仏祖賛の一つとして運良の偈頌を伝えている点でも貴重であろう。この画賛はおそらく加賀の大野尼寺との関わりからして運良が伝燈寺において筆毫したものであろうが、運良が詩僧としても画僧としても一流であったことを伝える記載なのである。

さらにこの記事によって注目されるのは大野尼寺に居住していた尼僧たちの存在であって、すでに述べた興禅寺や兜率寺という運良が開創した他の尼寺などをも踏まえるなら、運良という人は尼寺の存在を重要視し、尼僧に対する接化を大切にして深い関わりを持ち、積極的に女性層に仏法を示そうとしていた姿勢が窺われる。『金沢市大野町史』の「宗教と文化」の「寺院」には「大野尼寺址」として大野尼寺に関する簡略な記事を載せているが、わずかに運良の描いた大悲観自在菩薩像の因縁を記すのみで、その所在地が具体的に大野地内の何処に存したのかは定かにしていない。(27)

ちなみに「行状」や「行実」には、この因縁について、

奇峭の語、学せずして之れを能くす、蓋し夙に般若の力を薫ずるに非ざらんや。無師自然の智は豈に企及すべけんや。

ということばが付記されている。奇峭とは山が険しく聳え立っているさまであるから、運良はどんな難解な語句も自然にその意を明らかにしたらしい。それを般若の力とか無師自然の智と表現しているわけであり、努力して目標に達するというのではなく、運良に自然に備わった天性のものだと評している。これは運良が如何に天性の資質に恵まれた学識兼備の善知識として評価を得ていたか、その示す語句が如何に深い内容を述べたものであったかを示すものであろう。

また第三に「行状」や「行実」には、

兜率尼寺、欝攸に変を作し、地密にして祖塔に迩し、燎焔の勢い、殆んど救うべからず。乍かに神人数輩、頻りに瓶水を猛煙に注ぎ、挙衆、仰見す。時に北風忽ち南し、塔院は恙無く、自ら画く所の不動尊像、灰燼中に粲然たり、遠近頂礼す。

という記事が載せられている。この点を『扶桑禅林僧宝伝』では「又た兜率寺有り、師の塔に近し、偶たま回禄に遭い、勢い甚だ急にして将に塔に迫らんとす。一衆、張皇して奈何んともすべき無し。俄かに神人数輩が水を煙焔の上に注ぐを見る。而して塔は恙亡し」と記し、また『本朝高僧伝』にも「兜率回禄し、火勢尋急にして、将に良の塔に逼らんとす。俄かに神人数輩が瓶水を烟焔の上に注ぐを見る。而して塔は恙無し」という簡略な記載を伝えている。

すでに述べたごとく越中放生津に存した兜率尼寺は興化寺

と近接しており、運良の祖塔にほど近かったとされている[28]が、運良の示寂して後、たまたま兜率寺が回禄に遭い、その燎焔の勢いがあまりに急で手の施しようのない状態となり、猛火は運良の塔院にまでも及ばんとしたという。その時期は明確には記されていないが、おそらく内容からして運良の示寂から時期的にもそれほど経っていない頃、すなわち運良の徳化がいまだ及んでいた時期のことと見られる。その時、にわかに数人の神人が現れて頻りに瓶水を猛煙に注ぎ、寺の尼衆は挙ってそのさまを仰ぎ見ていたとされる。時に北風がたちまち南風に変わり、運良の塔院は何らの損壊もなく、また寺に所蔵されていた運良が生前に自ら画いた不動尊像も灰燼の中に鮮やかなすがたを見せていたので、遠近の人々が頂礼したとされる。ここでも運良示寂後の逸話ながら、やはり神人による加護が語られている点で特徴的なものがあり、また運良が生前に画僧として鮮やかな不動尊像を画いていたことも知られる。

この記述から風向きを考慮すると、兜率尼寺が興化寺ないし塔院から北側に位置していたことが知られ、海風から山風に変わったことで塔院さらには興化寺が無事であったことが察せられる。また、この話は神人化度の説話としても興味深く、風鎮めや火防などの面からすると、降水を司る水神としての八幡信仰を物語っているのかも知れず、あるいは近隣の放生津八幡神社などから神官のごとき人々が逸早く兜率寺に駆け付けて鎮火に尽力したのがこのような伝承となったのではなかろうか[29]。いずれにせよ、運良の徳化が地元の諸信仰とも共存して多くの支持者を得ていたことも指摘できるのではなかろうか。

さらにこのとき兜率寺の伽藍は灰燼と帰したことが知られるわけであるが、この寺がその後に復興され得たのか、あるいはそのまま再建されずに終わったのかは定かでない。ただ、後に興化寺も中興されたことが伝えられているから、兜率寺も一時期は再建されていたものと見てよいであろう。一方、尼寺で不動明王像が飾られていたことも興味深く、兜率寺の尼衆は日々に運良自筆の不動明王画像を拝し、自身の内には煩悩を断ち切り、外に向かっては災難を追い払い焼き滅ぼすことを自らに課していたのかも知れず、信仰心の深まりのごときものをも窺うことができよう。

運良が埋葬された後、以上に述べたほかにも霊異はきわめて多く存したものらしく、「行状」と「行実」には、

履を痊むるの後に及んで、霊異頗る多ければ、備さに載するに遑あらず。

と記されている。この点は『扶桑禅林僧宝伝』でも「其の霊異、此れに似る者多く、筆舌の能く殫く記する所に非ざるなり」と記され、『本朝高僧伝』にも「異迹孔だ多ければ、悉

く記するに遑あらず」と伝えられているから、そのすべてを載せ切れないことを断っている。このように運良にはその生前のみでなく、示寂して以降も数々の霊異譚が伝えられているわけであるが、「行状」や「行実」がこれほど多くの奇瑞を収録している背景は定かでないものの、これらの霊異譚から窺えることは、運良が示寂して後も神異僧として近隣にその名を轟かせていた事実を後生に残さんとしている伝記史料の編集意図であろう。「行状」や「行実」に伝えられる内容がすべて史実とは見がたいわけであるが、なんらかの歴史的な背景が存しない限り、これほど多くの霊異をあえて載せる意図は頷けないのではなかろうか。運良は方便として多くの奇瑞を現じて衆生済度に邁進していたわけであるが、その死後においても何らかの影響を及ぼしたことを強調することは、運良の門流に属する人々にとって道俗に対する為人接化の面で多大の効果をもたらしたはずである。

運良は加賀や越中における臨済宗法燈派の中心的な存在として、曹洞宗などと対峙せざるを得なかったわけであり、当然、組織的な展開を果たしつつあった曹洞宗など他の勢力との確執の上でも、運良の門下や門流に連なる禅者らは派祖である運良の力量を誇示し、その為人接化の偉大さを明示しなければならなかったはずである。そうした中で接化の手段方便として強調されたのが、先のごとき運良にまつわる霊異譚ではなかったか。門流の人々による要請から祖師としての正統性が運良に課せられ、多くの霊異譚が捏造された面もないわけではなかろう。こうした伝説逸話が運良の存在をより偉大にし、布教接化に大きな手助けとなったであろうことは想像に難くない。

そして最後に「行状」と「行実」には、

今ま始末の大概を撫め、之れを大手筆の草本に具え、以て潤色して万世の標準と為し、此の山の与めに磨さざらんと欲す。法孫比丘某甲、謹んで状す。

と記されている。これによれば、運良の「行状」は僧名は不明ながら法孫比丘某甲が運良の生涯の足跡を集め、それ以前にまとめられていた草本に潤色を加えて万世の標準となし、この山すなわち興化寺のために運良の事跡を後世に不朽ならしめんとして著したものであることが知られる。「行状」ないし「行実」より以前に如何なる伝記史料が存したかは定かでないが、おそらく運良に関する簡略な足跡（始末の大概）を記した基本史料が予めに存し、これに運良にまつわる霊異譚などを付加し、かなりの脚色をなして成立したものこそ「行状」または「行実」であったことが知られ、そこに伝記作者の意図を読み取ることができよう。[30]

この点、「行状」や「行実」に記される潤色的なところを削ぎ落とした基本史料ともいうべき運良に関する伝記史料が

今日に残されていれば、なお、かなりの面で運良の伝記に関する比較考察が可能となったはずであろうが、残念ながら示寂当時に著されたと見られる原初的な伝記史料は何ら残されてはいない。

後世の評価

では、運良に対する後世の評価はどのようなものであり、また、それはどのように変化していったのであろうか。京都における法燈派の拠点として知られる正覚山妙光寺の記事を集めた『妙光雑記』の冒頭には「仏眼禅師無門和尚自賛」と「法燈国師像賛」につづいて、

興化開山恭翁良禅師〈写本在二如是一〉。　楚石琦禅師。

初見二法燈老国師一、便参二狗子無仏性一、打二破漆桶一、帰二随黄龍一。去二臥席一者、三十余年、成二禅林一者、幾百千指。開二建興化一、遷二住大乗一、兼領二妙雲両山一、力辞二鷲峰巨利一。以二一譲一表二其志一、則四方服二其高一。帰雲終恋二於故林一、成レ学願聞二於直指一。平昔□安二多衆一、及レ終寿過二七旬一。生前爪髪自生二設利羅一、最後荼毘同奉二窣堵波一者、此日本国黄龍開山仏慧禅師恭翁良和尚遺像也。

という元末明初の中国江南禅林に活躍した大慧派の楚石梵琦（西斎老人・仏日普照慧辯禅師、一二九六―一三七〇）が著した運良の頂相に対する祖賛が伝えられている。東京大学史料編纂所に所蔵される『妙光雑記』にはこの運良に対する祖賛につづいて、さらに同じく梵琦がなした「桂岩芳禅師賛」も載せられているから、「法燈国師像賛」「興化開山恭翁良禅師賛」「桂岩芳禅師賛」の師資三代の祖賛はほぼ同時期に梵琦によって著されているものと見られる。[31] ちなみに「法燈国師像賛」には「日本国鷲峯開山法燈国師遺像、師孫比丘貞遠請賛」とあり、また「桂岩芳禅師賛」には「大明洪武初元龍集戊申、嘉禾天寧楚石梵琦」とあることから、これらの祖賛は明建国の洪武元年（一三六八）の前後に梵琦が嘉興府（浙江省）嘉禾の天寧報恩光孝禅寺の住持として日本から到った覚心の師孫比丘に当たる貞遠の請によって賛を付していることが判明する。[32]

いま、この「興化開山恭翁良禅師賛」によって窺われる事実を考証してみることにしたい。はじめに「興化開山恭翁良禅師」とあるから、梵琦の席下に呈された運良の頂相は黄龍山興化寺の開山という名目で依頼されたものであったことが知られ、しかも「此の日本国黄龍開山仏慧禅師恭翁良和尚の遺像なり」として仏慧禅師の勅諡号が使用されているから、北朝の延文五年（一三六〇）に後光厳天皇が亡き運良に勅諡号を下賜して以降の作ということになる。

さらに賛の冒頭に「初めて法燈老国師に見えて、便ち狗子無仏性に参じ、漆桶を打破して、黄龍に帰随す」とあるの

は、運良が覚心に相見して「趙州狗子無仏性」の古則公案を参究し、迷蒙を打ち破って禅の心境を深めたことを述べているが、黄龍とは興化寺のことを指すのであろうか。また「臥席を去るは、三十余年、禅林を成すは、幾んど百千指」というのは、およそ三〇年間にわたり運良が寝食を忘れて真摯に学人接化に努め、幾一〇人から幾一〇〇人にも及ぶ門人らを育てて禅林を形成したことを述べたものであろう。

ついで「興化に開建し、大乗に遷住し、兼ねて妙雲の両山を領し、力めて鷲峰の巨刹を辞す」とあるのは、運良が化導を敷いた諸寺における消息を述べたものである。ただし、ここにおいて問題なのは、あたかも興化寺に法幢を建立して後に大乗寺に遷住したかの感を受けることであって、おそらくこれは表現上のことでしかなく、大乗寺を去った後に興化寺を開創していることは動かないであろう。また「妙雲の両山を領し」とあるから、あるいは法孫の蔵海無尽が加賀の地に建立したとされる龍興山妙雲寺ももともと運良ゆかりの禅刹として出発しているのかも知れない。さらに「力めて鷲峰の巨刹を辞す」という表現が存していることから、師の覚心が開創した紀伊(和歌山県)由良の鷲峰山西方興国禅寺から運良に対して住持就任の要請が存したらしいことが知られるのであって、しかも運良はその要請を固辞して受けなかったもののようである。興国寺との関わりや招聘の時期など、その詳細については定かでないが、そこに北陸に地盤を置いて再び興国寺に赴くことのなかった運良の隠れた一面が窺えて興味深い。

ついで「一譲を以て其の志しを表し」とあるのは、一たび退き譲り与えるということから、運良が大乗寺の席を勇退してその孤高な志しを貫いたこと表現したものであろうか。また「則ち四方、其の高きに服す」とは、四方の学徒が運良の高尚な禅風に心服したことをいうのであろう。「帰雲は終に故林を恋い」とは、帰雲は帰り行く雲、故林はもと居た林、昔なじみの林であるから、運良が山林の自然の風光を愛したこと、さらには禅の叢林の風規を慕ったこというのであろうか。「学を成して願いて直指を聞く」とは意味がよく分からないが、運良が仏教の学問を究めてからさらに禅の直指単伝のありようを求めたことをいうのであろうか。「平昔は□として多衆を安んじ、終るに及んで寿は七旬を過ぐ」とは、運良がふだん多くの修行僧(大衆)を賄い、七旬すなわち七〇歳を過ぎて生涯を終えるまで怯むことがなかったさまを述べていよう。「生前の爪髪、自ずから設利羅を生じ、最後の荼毘、同じく窣堵波に奉ず」とは、運良が生前に切り落とした爪や髪が自然と舎利と変じたこと、さらに示寂して後に荼毘に付するや、それらを遺骨とともに率都婆すなわち墓塔に奉安したというのである。これによれば、すでに梵琦が賛を付

する以前から運良にまつわる舎利の神異が広く知られていた事実を窺うことができる。

このように梵琦がなした祖賛は時期的に運良が示寂して二〇数年後のことであるだけに、その信憑性は高いものといってよい。もちろん、梵琦は元末明初の臨済禅者であるから、運良その人を実際に知ることはなかったわけであるが、こうした第一等の中国禅者に祖賛を依頼していることから、その背景として興化寺叢林がかなり充実していた様子が窺えるのである。ただし、この祖賛をはじめとする慧開・覚心・運良・運芳という師資四代の頂相賛は興化寺ではなく、京都の妙光寺に残されていたわけであるが、これらはおそらくもともと興化寺に所蔵されていたものと見られ、興化寺の廃絶に伴って妙光寺に移されたか、あるいは賛のことばのみが書写されたものではないかと推測される。また「写本は如是に在り」とあるが、この如是とは建仁寺山内に存した仏光派の此山妙在（一二九六―一三七七）の塔頭である如是院のことを指しているかも知れないが判然としない。

つぎに「塔銘」の撰者である華岳建胄が記した運良に対する銘文についてもその内容を検討してみることにしたい。すなわち、建胄が撰した銘文を示すならば、

厥銘云、赫々慧日、光破二夏夷一、常照寂爾、曾無二盈虧一。維師行業、古今不レ移、大機大用、殺活臨レ時。嗔拳熱喝、一等慈悲、

（二）

如二遼天鶻一、似二踞レ地獅一。勅号再降、契二両朝帝一、法運所レ系、承二一国師一。南紀創レ業、北越建レ基。平生確論、潜子器レ之。大唱二祖道一、盛行二禅規一。青鷹瑞兆、大陽孤児、一夢両覚、彼々不レ知。経像示レ異、神鬼著レ奇。東山祖図、聯二彼五葉一、南方仏法、分二此一枝一。若（若）堕二歯牙一、若レ剃二髪髭一、設利如レ粟、貼レ器離々。又化火後、璨如二摩尼一、烟気所レ及、木葉琉璃。雲湧二青巒一、無縫之塔、月印二滄海一、不磨之碑。大人境界（憶）、豈易二津涯一。（期）欝彼象教、僮々万支、龍天所レ護、日月無レ斯。

というものであり、そこには運良の足跡を賛辞したことばが連ねられている。建胄は運良とはおよそ一世紀を隔てて活躍した禅者であり、運良に対する再顕彰に当たって依頼されて「塔銘」を撰しているわけである。つぎに「塔銘」に記される建胄の賛の内容を順次に整理してみることにしたい。

最初に「赫々たる慧日、光は夏夷を破り、常照寂爾として、曾て盈虧無し」とあるのは、盛んに照り輝く仏法の光明が中国（中夏）や日本（東夷）を静かに照らし、満ち欠けなく一様に注いでいることをいう。とりわけ、慧日とは運良の勅諡号である仏林慧日禅師を踏まえ、常照寂爾というのも運良の墓塔である大光塔が存した常寂室を踏まえた表現にほかならない。

つぎの「維だ師の行業、古今に移らず、大機大用、殺活、時に臨む。嗔拳と熱喝、一等の慈悲、遼天の鶻の如く、地に

踞る獅に似たり」とは、運良がなした学人接化の特徴を述べたものである。運良は払拳棒喝を振って殺活自在の大機大用をもって学人を指導する臨済禅特有の接化をなしていたわけであるが、[33]しかしながら単に厳しいだけでなく、その背景に深い慈悲の念が脈々と波打っていたというのである。そうした運良のありようを建胄は遥か天高く飛ぶ鶻すなわち隼（くまたか）に準え、また大地に踞る獅子に喩えており、威厳に満ちた行跡を古今不易のものとして称えている。[34]

また「勅号再び降り、両朝帝に契い、法運の系なる所、一の国師を承く。南紀にて業を創し、北越にて基を建つ」とは、運良の示寂後に後光厳天皇と後小松天皇より勅諡号が二度にわたって下賜された事実と、南紀由良の興国寺において法燈国師覚心に就いて仏道修行の基礎を築いてその法統を伝え受け、北越の地に移って法門の基である諸禅刹を打ち建てた足跡を述べたものである。

さらに「平生の確論、潜子、之れを器なりとす。大いに祖道を唱え、盛んに禅規を行ず」とは、平生において運良が明確な議論をなして潜徳の士を法器と見抜いて指導し、大いに仏祖の法道を吹唱し、盛んに禅門の規矩を行じたことを示している。これは運良が問答商量によって学人の器量を見極め、適切な指導接化をなしたことを称えるものであり、とりわけ叢林の行持規範である禅規を重視した点が強調されているのは重要であろう。運良が実際に如何なる清規に基づいて禅規を行じたのかは定かでないが、おそらく由良興国寺の規範に基づいた実践をなしていたものと推測される。

ついで「青鷹の瑞兆、大陽の孤児、一たび夢み両たび覚し、彼々知らず」とあるのは、瑩山紹瑾が青鷹の飛来する瑞兆を夢見て運良の来訪を知ったことと、北宋代の大陽警玄と投子義青（青華厳）の代付を踏まえて紹瑾と運良の間でなされた相見を語るものである。しかもその消息は他の人々には量り難いものであったことが述べられており、両者の相見が特別の意味を持っていたことが強調されている。

また「経像は異を示し、神鬼は奇を著す」とは、火中に投じた『金剛般若経』が燃えずに残ったことや、運良自筆の観自在菩薩画像と不動明王画像が火災に遭っても燦然と残っていた消息を語り、また運良が生前になした多くの神異や随所に神人による外護が存したことなどを語るものである。

さらに「東山の祖図、彼の五葉を聯ね、南方の仏法、此の一枝を分つ」というのは、臨済宗楊岐派の流れが五祖法演より五代にわたって継承され、やがて覚心によって日本に伝えられ、運良にまで至ったことを述べている。東山の祖図とはすでに述べたごとく、国泰寺に所蔵されて現存している「東山七葉頂相宗派之図」のことを指している。南方の仏法とは具体的には紀伊由良の興国寺に展開した法燈派の禅旨を指し

ており、その一枝が運良によって北陸の地に扶植されて繁茂したことを示している。

つぎの「歯牙を堕するが若き、髪髭を剃るが若きは、設利、粟の如く、器に貼いて離々たり。又た化火の後、瑩たること摩尼の如く、烟気の及ぶ所、木葉は琉璃となる」とは、すでに述べたごとく運良の歯牙が抜け落ちたり、また自ら髪や髭を剃ったりすると、その抜け落ちた歯や切り落とした髪髭などが舎利となって器にちりぢりに粟のごとく貼り付いていたという逸話である。ついで記されているのは運良の遺体を火葬荼毘に付した際の消息であって、摩尼宝珠のごとき舎利が得られ、火葬の煙りの及ぶところ、木の葉が瑠璃と化したという奇瑞を述べている。

また「雲は青巒に湧く、無縫の塔、月は滄海に印す、不磨の碑」とは、越中の興化寺に建てられた運良の無縫塔（卵塔）と石碑（塔銘）が山を背に海に臨んで屹立しているさまを述べたものである。この表現によっても「行状」や「塔銘」がもともと越中放生津の興化寺ゆかりの史料として撰され、とりわけ、「塔銘」は運良の功績を後生に不朽に伝えるべく建冑によって撰され、これを興化寺の禅者らが運良の大光塔の傍らに立石したものであることが判明する。

さらに「大人の境界、豈に津涯に易めんや。欝たる彼の象教、僮々たる万支、龍天が護る所、日月斯きる無し」とは、運良の境界が捉えどころなく大きなものであり、一処に収めきれないことを語っている。津涯とは水際・岸辺とか船着き場のことであり、ここでは一ヶ所に収めきれないほどの度量の広さを表現している。象教とは仏の教えのことであり、僮々たる万支とは盛んに覆い茂っている枝葉のことであろう。運良の示した仏法が龍天の外護を得て無窮に伝えられるであろうことを述べている。

このように建冑は運良の足跡を個々に取り上げて賛を付しているわけであり、いずれも運良の徳風を最大限に称えんとする建冑の筆致が偲ばれる。ただ、建冑も実際の運良その人を知ることはなかったのであり、しかも「行状」などのごとく運良の伝記にはかなりの脚色や付加がなされてしまっていたことから、勢い建冑の賛語にも賛嘆と憶測が交錯している感が見られる。

一方、これに対して江戸期の卍元師蛮も『本朝高僧伝』において、運良に対する賛語として、

仏林禅師、究二曹洞玄妙一、得二臨済正宗一。其心地之明也、如三日月照二三千世界一。乾坤之内、宇宙之間、何物有レ所レ隠二其影一耶。種種妙用、種種霊験、亦是自二大覚中一所二流出一也。夫睿尊・凝然者、律苑雑華之英傑、及三一聞二禅要一、致レ誠破レ疑。非レ具二信根一、曷能至レ如レ斯耶。余逢二戒壇院主一、尋二旦過寮之事一。主指二其攸一、有二旧疆之跡一鞠作二茂艸一。因自歎惟、昔者禅教共信実底

人、故皆有レ得レ益。今也自他之宗、人我山峻、互執二矛盾一。吁、古人之風、日以尽矣痛夫。

という祖賛を残している。師蛮は運良より四世紀以上を隔てた人であるが、その語る賛の内容についても一通り整理してみたい。

前半の「仏林禅師、曹洞の玄妙を究め、臨済の正宗を得たり。其の心地の明らかなるや、日月の三千世界を照らすが如し。乾坤の内、宇宙の間、何物か其の影を隠す所有らんや。種種の妙用、種種の霊験、亦た是れ大覚中より流出する所なり」とあるのは、運良が瑩山紹瑾に就いて曹洞の玄妙なる宗旨を究め、無本覚心に参じて臨済宗の正伝を得たことを述べ、洞済両宗に通じたことを強調したものである。さらに運良の心地が如何に明白であったか、その種々の妙用・霊験が悟道の境地より流れ出ていることを語っている。

後半の「夫れ睿尊・凝然というは、律苑雑華の英傑にして、一たび禅要を聞くに及んで、誠を致して疑いを破る。信根を具するに非ずば、曷んぞ能く斯の如くに至らんや。余、戒壇院主に逢い、旦過寮の事を尋ぬ。主、其の攸を指すに、旧疆の跡有りて鞠ちて茂艸と作る。因りて自ら歎じて惟えらく、昔は禅教共に信実する底の人、故に皆な益を得ること有り。今や自他の宗、人我、山峻にして、互いに矛盾を執る。吁、古人の風、日に以て尽く、痛しいかな」とは、東大寺における運良と凝然の商量を踏まえ、師蛮が戒壇院旦過寮のその後の消息を追ったものである。それによれば、師蛮が東大寺戒壇院に赴いて院主に旦過寮のことを尋ねたところ、院主はすでに草むらとなっていた旧址を指し示したとされる。このとき師蛮は往古の僧侶が禅・教ともに究めて仏道に純真であったあとかたを偲び、江戸期の師蛮当時における宗派意識にとらわれた弊風を嘆いている。

嗣法門人とその門流の展開

では、運良の学人接化によって育成された嗣法門人には如何なる人々が存したのか。運良の法嗣に関しては史料の不足からその詳細があまり明確にされていないが、ここでは限られた文献史料を通し、できうる限り運良門下の人々についてその消息を整理してみることにしたい。

今日、運良に参学してその法を嗣いだ門人として知られる禅者には、越中の長慶寺開山である絶巌運奇と、京都建仁寺の桂岩運芳（仏照禅師、？―一三七七）と、越中の蓮華寺開山である呑像運光（仏心円成禅師、？―一三五一）および加賀の伝燈寺第二世である至庵綱存（円通仏眼禅師、？―一三五七）といった人々の名が知られている。また蓮華寺の第二世の天外運義（慈照禅師、？―一三七一）と同じく第三世の蒙庵運聡（大陽禅師、？―一四〇二）の二人も運良の法嗣であったと推

測される。いま、[35]彼ら法嗣とその門流を系譜にすると、

- 恭翁運良
  - 絶巌運奇
    - 蔵海無尽
      - 商岩　佐
    - 明室亮聡
  - 至庵綱存
  - 桂岩運芳
    - 玉岩周光…〔中断〕…文坡祖広
  - 呑像運光
    - 岳雲
  - 天外運義
    - 〔不詳〕
      - 南陽　訢
        - 円珠　照
  - 蒙庵運聴
    - 善従

という簡略な法系図が辿れるのである。運良の久しい接化期間からすれば、今日、その名の知られる法嗣がわずか数人というのはあまりに少ない感もあり、各門流のその後の展開からいっても多くの禅者が活動していたわけであるが、運良の門流に関して問題なのは、その嗣法関係がほとんど明確に辿れない点であろう。運良ゆかりの寺々の住持者の嗣法関係が明確でないために法系図として成立させることができない現状なのである。

ともあれ、運良の法嗣と見られる六人の禅者およびその門流について、その消息の一端を窺って見ることにしたい。合わせて運良とその法嗣らの門流がその後どのように展開したのか、いつ頃までその法統は維持されていたのか、ゆかりの禅刹における門流の展開と法統の継承についても簡略に触れておくことにしたい。

なお、便宜上、ここでは運良の門流を仏林慧日禅師に因んで仮に仏林派と称しておくことにしたい。ただし、現今においては嗣法関係を通して仏林派の動静を把握することが困難なのであり、一応ここでは運良ゆかりの禅刹がどのような変遷を辿ったのかを整理し、いつ頃まで門流がつづいたのかを大まかに解明してみるに留めたい。

(1)絶巌運奇

この人は法諱を運奇といい、道号を絶巌または絶岩と称している。運奇は越中（富山県）に護国山長慶寺を開創して開山祖師になったとされており、江戸時代の燈史や僧伝ではわずかに運良の法嗣として一人だけその章が載せられている禅者にほかならない。すなわち、運奇に関しては『延宝伝燈録』巻一五「越中州護国山長慶寺絶巌運奇禅師」の章に、

越中州護国山長慶寺絶巌運奇禅師、初遊二洞家門閫一、研二究五位一。帰二恭翁輪下一、開二悟本源一、為二長慶第一世一。臨終集二諸徒一曰、示二汝等末後緊要処一。良久曰、喫茶珍重。即時脱去。

とあり、また『本朝高僧伝』巻三四「越中長慶寺沙門運奇伝」にも、

釈運奇、字絶巌。初遊二耆宿之門一、明二洞上之旨趣一。後届二賀州伝燈寺一、参二恭翁良禅師一、伝二持衣鉢一。越中檀越、慕二奇風義一、開二護国山長慶寺一、請為二開山始祖一。向レ北之禅侶、多帰二輪下一。臨終集レ徒曰、示二汝等於末後全機一。良久曰、喫茶珍重。奄然

就化。有弟子無尽、号蔵海。賀州檀信、掇龍興山妙雲寺、招為第一世矣。

として、きわめて簡略ながら事跡が記されている。そのほかに運奇に関する注目すべき史料として『禅林諸祖行状』五の巻末に法嗣の蔵海無尽が加賀の妙雲寺の住持として京都建仁寺の桂岩運芳に請うた運奇の頂相賛が伝えられている。すなわち、その全文は、

長慶開基絶巌和尚賛。

奇嵓絶岳大嘘嶮、万仞峯頭誰得玄。理摩訶衍之條、掃除洞山五位、拠新善光之址、提起法灯三伝。万象側耳、虚空擎拳、打破無門関、大行不伝正令、掀飜仏恵海、宏次未了勝縁。無端将戒定恵三学、偏作漫天網子、向北海路、鯨涛之南、欄空一撒。直得、大光普照包日月、醒風無碍匝坤乾。掲示末後全機、喫茶珍重、挙揚向上的旨、栗棘金圏。宝剣出函光射斗、妙用縦横瞎驢辺、曠劫恩波瀾無底、毘盧蔵海月明天。

絶岩和尚慈相、妙雲寺蔵海長老請讃。　建仁師叔運芳拝書。

というものであり、これは建仁寺両足院所蔵『東山諸派古徳像賛仏事』二にも「絶岩和尚賛」として載せられている。(36)その内容は『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』の記事と兼ね合わせることによっていくつかの興味深い事実を提供している。この「長慶開基絶巌和尚賛」は運奇の慈相（肖像画）に対して妙雲寺の無尽が法叔の運芳に賛を願い、これに応じて運芳が建仁寺住持の肩書きで記したものであるが、無尽が運芳にとって法姪に当たることから運芳は自ら師叔と称しており、すでに示寂していた法兄の運奇に対して祖賛をなしたものである。文中に「仏恵」とあるから、延文五年（一三六〇）に運良に仏恵禅師（仏慧禅師）の勅諡号が下賜されて以降の記事ということになり、その頃に運奇も示寂しているのかも知れない。しかも「慈相」とあるから、運奇は慈愛に満ちた温厚な風貌をしていたものらしく、この祖賛は運奇の人となりを同門の運芳が直に記している点で第一等の貴重な資料といってよく、その内容の分析を通していくつかの興味深い事柄が導き出されるわけである。

「長慶開基絶巌和尚賛」の冒頭には「奇嵓絶岳、大いに嘘嶮、万仞峯頭、誰か玄を得ん」と記されているが、これは運奇の道号や法諱を踏まえた表現であり、その徳風の容易に近づき難い厳峻孤高なさまを述べたものである。運奇はその郷関や出自の俗姓などは定かでないが、はじめ曹洞宗の老宿の門に投じて洞上の旨趣を明らめ、五位を研究していることが知られる。この点は「長慶開基絶巌和尚賛」でも「摩訶衍の條を理り、洞山の五位を掃除す」のことばがあるから、運奇は大乗の教学を究め、さらに曹洞宗の「正偏五位」の機関にも精通していたことが窺われるが、やがてそれらを払い去っ

たとされている。当時、曹洞宗の禅者で偏正五位などを盛んに唱導していたのは明峰素哲や峨山韶碩らであるから、おそらく運奇も永光寺や総持寺その他でそうした北陸の曹洞禅者に学んでいるのであろう。[37] ところが、運奇は後に曹洞下を離れて加賀の伝燈寺に赴いて運良に参じ、本源を開悟して衣鉢を伝持して臨済宗法燈派の一員となっている。おそらく運奇は状況からして曹洞宗から臨済宗法燈派に転じた人であり、両派の不和の中で運良に組みして伝燈寺に赴いているのかも知れない。

その後、越中射水郡の檀越が運奇の風儀を慕って護国山長慶寺を開創し、運奇を開山始祖（第一世）に拝請したとされている。その背景には運良が放生津の興化寺を中心として越中に基盤を開拓したことが挙げられ、おそらく興化寺の僧団の威儀に触れ、運奇の人となりに敬服した人々が集って、長慶寺伽藍の開創へと進んだのであろう。『扶桑五山記』二「大日本国禅院諸山座位条々」「諸山」の「越中州」には、

護国山長慶禅寺。開山絶岩禾上、嗣二恭翁一。恭翁嗣二法灯一。

とあり、後に長慶寺が越中の諸山に列していることが知られる。[38] 当時、北地に向かった禅侶の多くが運奇の輪下に投じたとされ、その門風が盛んであったことを伝えている。運奇がかつて曹洞禅者に参学して曹洞宗旨にも精通していたことから、おそらく師の運良と同じく運奇の席下にはその禅旨を究めんと参学研鑽する北陸の曹洞禅者も存したことであろう。

この点については「長慶開基絶巌和尚賛」では「新善光の址に拠り、法灯の三伝を提起す」とあり、新善光の址が何を指すのか定かでないが、これがあるいは長慶寺の前身としての越中の新善光寺のことを指しているのかも知れない。いずれにせよ、運奇は運良の仏法を嗣続して法燈派の第三伝として化導を敷いたことが称えられており、つづいて「万象に耳を側て、虚空に拳を擎げ、無門関を打破し、大いに不伝の正令を行じ、仏恵の海を掀翻し、宏いに未了の勝縁を次ぐ」とあるのも、運奇が仏恵禅師すなわち運良の禅に投じて『無門関』を参究し、不伝の正令あるいは未了の勝縁を受け継いだことを示すものである。「端無くも戒定恵の三学を将て、偏に漫天の網子と作し、北海の路に向かい、鯨涛の南にて、欄空に一撒す」とあるのは、運奇が戒定慧の三学を修得して北陸に向かい、日本海の荒波に近い地で禅風を振るったことを述べている。

運奇は臨終に臨んで会下の徒衆を集めて「汝等に末後緊要の処を示さん」または「汝等に末後の全機を示さん」と語り、しばらくして「喫茶珍重」と述べて即時に奄然として脱化したと伝えられる。[39] ただし、運奇が示寂した年月日や世寿などは定かでない。長慶寺はすでに廃寺となって久しいが、今日の高岡市長慶寺町に存していたものと推測されている。

この点についても「長慶開基絶巌和尚賛」では「直に得たり、大光の普く照して日月を包み、醒風の碍無く坤乾を匝ることを。末後の全機を掲示す、喫茶珍重、向上の的旨を挙揚す、栗棘金圏」と記されている。はじめに運奇が自在の接化をなしたことを語り、ついで「末後の全機」とか「喫茶珍重」とあるのは、すでに述べたごとく運奇が示寂に臨んで商量した因縁を踏まえるものにほかならない。

ところで、越中射水郡に存したとされる長慶寺は運奇を開山としているが、運奇の住山して後およそ一世紀近い期間の状況が定かでない。その後、諸山に列しており、要才梁・円珠照・商岩佐・等章文苑・蘊秀英珍・英倫彝伯らが住持しているが、彼らはその後に興化寺に陞住しており、彝伯の場合はさらに建仁寺第二六〇世に就いている。このように長慶寺は興化寺と歩調を合わせるかたちで五山派の寺院となっており、戦国末期に至って衰退の一途を辿り、やがて廃絶しているものらしい。(40)

このほか、運寄は加賀地内のいずれかに龍雲総宜寺という禅刹をも開創しているものらしく、その寺の変遷こそ定かではないが、一五世紀初頭までは堂宇の整った禅刹として機能していたようである。(41)

運奇の法嗣としては蔵海無尽と明室亮聡という二禅者の名が伝えられている。この中で明室亮聡については、わずかに玉村竹二氏の『五山禅林宗派図』に運奇の法嗣としてその名が挙げられているが、(42)その足跡についてはいまだ明らかにしていない。

いま一人の蔵海無尽については先の「長慶開基絶巌和尚賛」によっても知られるが、比較的にその消息が判明するので、以下、一応の考察をなしておきたい。無尽はその郷貫や俗姓などは定かでないが、道号を蔵海と称し、運奇の法を嗣いでいる。すでに述べたごとく無尽は運良が示寂して後に運奇と同門の至庵綱存の会下か桂岩運芳の会下に在って侍者を勤めていたと見られ、加賀大乗寺に『一夜碧巌』その他を返還する使者となって明峰素哲に相見したことが知られている。その後、無尽は加賀の地に龍興山妙雲寺を開創しており、このとき無尽は師の運奇の頂相を法叔の運芳に呈し、運芳より「長慶開基絶巌和尚賛」の祖賛を得ているわけであるが、その賛の最後に「宝剣、出でて光を亟みて斗を射り、妙用は縦横たり瞎驢辺、曠劫の恩波、瀾は底無く、毘盧の蔵海、月は天に明らかなり」とあるのは、賛の依頼者である無尽の消息を語るものであって、運奇の禅を継承して妙雲寺で活躍する無尽のすがたが称えられている。ところで、『扶桑五山記』二「大日本国禅院諸山座位条々」「諸山」の「加賀州」には、

龍興山妙雲禅寺。開山蔵海、諱無尽、嗣二絶岩一。絶岩嗣二良恭

翁、恭翁嗣二法灯一。

とあることから、無尽が建立した妙雲寺は後に加賀の諸山（甲刹）に列していることが知られる。[43] しかしながら、この妙雲寺もやはりすでに廃絶しており、今日ではその所在地すら詳かでない。わずかに室町期に要才梁や芳中序仁（方中とも）などが妙雲寺の住持として活躍したことが知られる程度である。[44]

ところで、無尽は妙雲寺の住持を経た後に紀伊由良の法燈派本山であった鷲峰山西方興国禅寺にも陞住しており、夢窓派の絶海中津（仏智広照浄印翊聖国師、一三三六―一四〇五）は『絶海和尚語録』巻下「真賛」において、

前興国蔵海禅師。

法燈的裔、仏慧真孫、克伝二家業一、如二水有一源。霊鷲峯前、拈華之旨大顕、黄龍潭裏、溜天之浪自翻。一句全提空劫外、摩醯正眼耀二乾坤一。

という真賛を残している。中津は無尽が覚心（法燈）の的裔で、運良（仏慧）の真孫として霊鷲峰前すなわち興国寺に活動したさまを伝えており、中津と無尽はほぼ同世代で若干ながら無尽の方が一〇数歳ほど年長であったものと見られる。おそらく運良の門流として本寺格に当たる興国寺に陞住するのは桂岩運芳に始まり、無尽もこれを受けて興国寺に入山しているものらしいが、[45] 中世における興国寺の世代が明確でないことから、その活動のさまも定かでない。また中津のことばに「霊鷲峯前に、拈華の旨は大いに顕われ、黄龍潭裏に、溜天の浪は自ずから翻る」と示されていることから、無尽は興国寺に住持する以前に黄龍山すなわち興化寺にも住しているものと推測され、無尽が妙雲寺・興化寺・興国寺と歴住していることが確かめられる。また無尽の法嗣については明確でないものの、後に越中の長慶寺と興化寺に住持した商岩佐という禅者が無尽に参じて法を嗣いだ高弟かその門流に属する人ではなかったかと推測される。[46]

(2) 桂岩運芳（仏照禅師、？―一三七七）

この人は法諱を運芳といい、道号を桂岩または桂巌と称している。運芳は運良の門下では珍しくも京都五山の一である東山建仁寺に住持したほどの禅者であるが、なぜか江戸期の燈史や僧伝には立伝されておらず、その活動についての記載などが存していない。わずかに『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禅寺」の「住持位次」に、

五十三、桂岩禾上、諱運芳。嗣二恭翁一、恭翁嗣二法燈一。本州人。永和三年丁巳十二月十五日入滅。室扁二天香一、塔二于常照院一。

とあり、さらに幸いにも江戸中期に建仁寺両足院に住持した白隠系の高峰東晙（魯峰、一七一四―一七七九）がまとめた『東山塔頭略伝』の「常照院」の項にも、

開基、桂岩和尚。

師諱運芳、号桂岩。京師人。嗣二法仏林禅師恭翁良一、良嗣二法燈国師一。歴二住興化〈越中州〉・常興〈備後州〉・興国〈紀州〉・□(妙)光・京師万寿〈第三十五世〉・建仁〈第五十三世〉一。永和三年丁巳十二月十五日示寂。塔二于常照院一、室曰二天香一。此院、越中州長慶寺・興化寺等、一派輪次主レ之。後罹レ兵毀、廃絶已久。是故世次不レ詳、旧址今属二霊洞院一。

という記事が存していることから、今日、運芳については簡略ながらその消息の一端を知ることができる。(47) さらにいま一つ京都妙光寺の記事を集めた『妙光雑記』には、

桂岩芳禅師賛〈常照院開基、写本在二如是一〉。　同。

故家碩儒、為二国師範一。幼而秉レ志、投二仏慧一而一造二黄龍一、問擬レ発レ言、如三臨済而三遭二痛棒一。冷灰豆爆、枯木春回、打二破自己疑団一、明二得先師意旨一。及レ参二明極一、五千巻従レ頭剗除、直謁二建仁一、第二座直下領略。与二無隠一□分二風月一、主二正覚一改二観山川一。遷二住松蓋常興一、移二鷲峰巨刹一、作二黄龍之三祖一、継二大父之百齢一。頭頭掲二示真規一、在在挙二揚奥旨一、見レ面自然信入、聞レ名無レ不レ除レ疑。座下羅羣公、堂中列高士、大聞二法施一、見坐二道場一。善知識難レ逢、大因縁可レ辨、日本国雖レ遠、桂岩師忽来。未レ免近前道二箇不審一。天共二白雲一暁、水和二明月一流。

大明洪武初元龍集戊申。　嘉禾天寧楚石梵琦。

という大慧派の楚石梵琦（西斎老人・仏日普照慧辯禅師、一二九六―一三七〇）が明建国の洪武元年（一三六八）に嘉興府（浙江省）嘉禾の天寧報恩光孝禅寺の住持として著した運芳の頂相に対する祖賛が伝えられている。梵琦は中国禅林で活躍した禅者であるが、運芳とほぼ同世代を生きた人であるから、その内容は間接的にせよ貴重な第一等のものであることは疑いない。(48) しかも、これは寿像に対する賛であって、運芳がいまだ建仁寺などに住する以前に画かれた頂相に対して付されたものである。そこで以下、『扶桑五山記』『東山塔頭略伝』および「桂岩芳禅師賛」に基づいて運芳の足跡を整理してみることにしたい。

『扶桑五山記』によれば運芳は「本州の人」と記されているから、山城（京都府）の出身ということになり、また『東山塔頭略伝』ではとくに「京師の人」と記されているから、京師すなわち京都の出身であったことが知られる。しかも「故家の碩儒、国の師範たり」とあるから、運芳は古くから続く名門の学者（儒者）の家柄に生まれたのではないかと推測される。このように運芳は山城の中でもとくに京都（洛中）に生まれたものと見られるわけであるが、京都出身の運芳が北陸の地で運良に参学するに至った過程や機縁の語句などは伝えられていない。おそらく運芳ははじめ京都禅林に投じて五山叢林の禅風を学んでいるものと見られ、その後に遠く加賀・越中に運良を訪ねているのであろう。「桂岩芳禅師

賛」では「幼くして志しを秉り、仏慧に投じて一たび黄龍に造り、問うて言を発せんと擬するに、臨済の三たび痛棒に遭うが如し」と記されているから、運芳は幼くして自ら志して出家の道を歩んだものらしく、その後に北陸の地に到って黄龍すなわち興化寺を中心に運良に参学し、唐代に黄檗希運が痛棒によって臨済義玄を接得したかのごとき厳しい指導を運良より受け、嗣法して法燈派に連なったことが知られる。ただし、興化寺での参学とする点は時期的に問題を含んでおり、おそらくそれ以前から運芳は運良に参学していたものと見られる。

『大乗聯芳志』「前住恭翁運良和尚」の章にも「法嗣一人、桂岩独芳」と載せられており、法諱が独芳に改められてはいるものの、運良の法嗣として運芳の名のみが挙げられている。また室町期に夢窓派の古篆周印が編した『仏祖宗派図』にも「興化開山恭翁運良」の法嗣として「建仁桂岩運芳」とあり、江戸初期に妙心寺派の桂芳全久が編した『正誤仏祖宗派図』四にも「興化開山恭翁運良」の法嗣として「建仁桂巌運芳」と載せられている。

運芳が参学期になした消息については定かでないが、単に運良に学ぶのみでなく、その前後に京都五山禅林の臨済禅者とも関わりを持っていたもののようである。「桂岩芳禅師賛」に「明極に参ずるに及んで、五千巻、頭より剗除し、直に建仁に謁して、第二座、直下に領略す」と記されているが、ここにいう明極とは元国より嘉暦四年（一三二九）に来日した松源派（焔慧派祖）の明極楚俊（仏日焔慧禅師、一二六二―一三三六）のことであろうから、運芳は運良の席下を離れて京都禅林の楚俊に参学する機会が存したものらしい。[49] 楚俊は京都の南禅寺や建仁寺に化導を敷いており、運芳はその席下で経論の研鑽を捨てて参禅学道に邁進したことが察せられ、ついで建仁寺において第二座を勤めて直下に旨を領じたとされている。

さらに運良はほかにも五山禅僧と関わりが深かったものらしく、『黄龍十世録』の『龍山和尚語録』「偈頌」には、

桂岩。

金粟香浮秋意嫩、肯同枯木倚雲隈、不談一字真般若、自有天花乱墜来。

という道号頌が伝えられている。[50] ここにいう桂岩が運芳のことを指しているとは断言できないが、これが明確に運芳に対して与えられたものであれば、運芳はその参学修道期に黄龍派（千光派）の龍山徳見（真源大照禅師、一二八三―一三五八）にも参学した経験が存していることになろうか。

また同様に運芳に関すると見られる偈頌として大鑑派の天境霊致（宝鑑円明禅師、一二九一―一三八一）の『無規矩』巻坤「偈頌」にも、

桂岩。

一叢金粟弄二秋光一、風度二蒼崖一露滴レ香、険絶路頭如進レ歩、不レ妨和レ月酌二天漿一。

という道号頌が伝えられている。[51] これも明確に運芳に対して与えられたものであれば、運芳はその参学修道期に霊致にも参学した経験が存したか、あるいはほぼ同世代の霊致と交遊して道号頌を得ていることになろう。しかも徳見も霊致も運良より後輩であることから、運芳がこの二禅者に参学あるいは道交を持ったとすれば、運良の席下を去って以降のことと見られる。こうした活動によって後に運芳はやがて五山十刹といった京都の官刹に住持する機会を得たのであろう。[52]

ところで、その後、運芳は諸刹を歴住しているわけであるが、その住持地の順序はいま一つ判然としないところが存する。すなわち、『東山塔頭略伝』と「桂岩芳禅師賛」との間で若干の相違が見られるのであって、以下、その点を踏まえながら運芳の諸山歴住を整理してみることにしたい。

『東山塔頭略伝』によれば、運芳ははじめ越中の興化寺に出世開堂して運良の後席を継いだことになっているから、おそらく運良の示寂して後に興化寺の住持を継いでいるものと見られる。興化寺が廃絶して久しく、かつ寺の歴史や歴住の消息も断片的にしか知られていないことから、実際に運芳が興化寺に入院した経緯などは定かでない。

ただし、「桂岩芳禅師賛」によれば「正覚を主りて山川を改観す」とあるから、運芳は最初に運良の師である無本覚心が開創した京都洛北の正覚山妙光寺にも住しているものらしく、『東山塔頭記』では妙光寺の第七世に、今津洪岳編『妙光寺過去帳』では第八世に運芳の名が列せられている。すなわち、白石芳瑠氏の「妙光寺歴世補稿」によれば、

7八　桂岩運芳　×恭翁　建仁五三　永和二・十二・十五△

〔像賛、妙光雑記〕

と記されている。妙光寺は山城(京都府)葛野郡鳴滝(いまの京都市右京区宇多野上ノ谷町)に存し、後には京師十刹の第八位に列したほどの名刹である。ちなみに運芳に先んじて妙光寺に住持しているのは孤峰覚明の高弟である古剣智訥(仏心慧燈国師、?―一三八二)であり、さらに運芳の後席を継いで妙光寺に住持している禅者としては、高山慈照の高弟である海雲禅慧(?―一三八五)がおり、覚明の高弟である聖徒明麟(?―一四二三)へと続いている。[53]

ついで『東山塔頭略伝』によれば、運芳は備後(広島県)の常興寺に遷住したとされるが、備後の常興寺とは備後松隈庄に存した松蓋山常興寺のことである。この点は「桂岩芳禅師賛」においても「松蓋常興に遷住す」とあって運芳が遠く備後に赴いていることが確かめられる。ただし、備後の常興寺もすでに廃絶して久しく、この寺で運芳がなした消息も定

かでない。『扶桑五山記』二の「日本禅院諸山座位次第事」の「備後州」によれば、

松蓋山常興禅寺。開山無伴禾上、諱智洞。嗣二法燈国師一。在二松隈庄一。

と記されており、常興寺の開山は法燈派で運良と同門に当たる無伴智洞である。(54) また丹波（兵庫県）の法常寺所蔵本『東海一漚集』の「後集」に「松蓋山常興寺請二海雲恵首座一疏」が存し、『無規矩』巻坤「疏」にも「海雲慧首座住二常興一法眷疏」が存していることから、運良と同門に当たる高山慈照の高弟である海雲禅慧なども常興寺に住持したことが知られている。おそらく運芳は法叔の智洞の後を受け、法従弟の禅慧らと相い前後して常興寺に住持していることになろうか。また常興寺は後に備後の諸山（甲刹）に列している。幸いに運芳が常興寺に住持する際の消息として、聖一派の乾峰士曇（少雲・広智国師、一二八五―一三六一）が『乾峰和尚語録』巻四の「偈頌」において、

賀二運芳書記住二松蓋山常興寺一。

松蓋相傾海水濱、無情凡木自知人、神龍推轂瑞応日、一筆追回七葉春。

という書記の運芳が常興寺に住山する際になした祝賀の偈頌を残している。(55) ここに瑞応とあるのは加賀の伝燈寺のことであり、七葉とあるのはおそらく「東山七葉図」を踏まえた発想であろう。運芳は五山叢林において書記の職位というかたちで常興寺に入院しているものと見られ、越中の興化寺が後に五山派に組み込まれていくのも運芳の活動によるところが大きかったのであろう。

また一山派の雪村友梅（宝覚真空禅師、一二九〇―一三四六）も『宝覚真空禅師録』巻坤「長篇」において、

桂岩芳書記、適赴二備州松蓋常興之嘉招一。因作二長句一、以祖二其行一耳。建武彊圉赤奮若之歳仲春下澣、書二于寓々軒一。

有レ山有レ山名二松蓋一、天地未レ形此山在、有レ叟有レ叟皈去来、松能傾蓋山能待。山与二松霊一叟亦奇、一時賓主風雲期、頭角嶄然世咸覩、瑞龍驚走黄龍馳。潜レ機痛掃禅家習、俊彩超倫誰可レ及、撑二腹文字一怒蜺蟠、脱二口珠璣一老蛟泣。君不レ見、昔人住山三箋風、麁衣糲食軽二王公一。又不レ見、芝詔三徴不二肯出一、閉レ門高レ枕烟霞中、出処行蔵聴二物化一、牛南馬北難二同駕一。請レ君芒屩下二東山一、試手挑取鷲峯法燈光照レ夜。

という記載を残している。(56) これもやはり書記の運芳が常興寺の請に赴くのに際して友梅が贈った長句である。ここに「建武彊圉」とあるのは建武四年（一三三七）のこととされ、その年の仲春に友梅は播磨（兵庫県）赤穂郡苔縄（いまの上郡町苔縄）の金華山法雲禅寺の寓々軒においてこの長句を記している。(57) 同じく友梅は『宝覚真空禅師録』巻乾「送寄賀謝唱和哀歎」においても、

謝二恵席松蓋長老一。

百丈当年曾巻却、金華此日要二敷開一、艸窠輥裏尋レ人処、多謝常興送寄来。

という偈頌を残しているが[58]、これもおそらく法雲寺の友梅が松蓋山常興寺の長老であった運芳に寄せたものであろう。

さらに『東山塔頭略伝』によれば、運芳は紀伊（和歌山県）由良の鷲峰山西方興国寺に出世したとされ、「桂岩芳禅師賛」にも「鷲峰の巨刹に移る」と記されているから、運良の門下として法燈派本山に陞住していることが判明する。この点、興国寺に関して諸史料をまとめた『鷲峰余光』などでも、中世における興国寺の世代が明確でなく、運芳が具体的に興国寺の第何世として入院したのか、また興国寺で如何なる接化をなしていたのかなど不明な点の多いことが惜しまれよう[59]。

『東山塔頭略伝』によれば、運芳は由良の興国寺に住持して後に京都の妙光寺に住院したかのごとく記されているが、この点は「桂岩芳禅師賛」では相違しており、興国寺での記載につづいて「黄龍の三祖と作り、大父の百齢を継ぐ」とあって、この時点で運芳が興化寺の第三世となって運良の禅風を受け継いだことを伝えている。運芳が興化寺の第三世ということになると、運良の後席を継いで第二世となった高弟が誰であったのかが不明となるが、おそらく運良の法嗣で運芳の法兄に当たる禅者（あるいは絶巌運奇か）が運良亡き後の興化寺を守っていたのであろう。

その後、運芳は京都五条樋口に存した京城山（九重山）万寿寺の第三五世に就いており、京都五山への陞住を遂げている。すなわち、『五山住持譜』「万寿禅寺歴代」には、

三十五、桂岩運芳。永和三年丁巳十二月十五日寂。

とあり、『東福寺誌』巻末の「京城山万寿寺住持歴代」にも「三十五、桂岩運芳（輝）、嗣二恭翁一」と記されている[60]。さらに先に示した大鑑派の天境霊致は同じ『無規矩』巻坤「疏」に、

桂岩和尚住二万寿一諸山疏。

諸仏入二微塵刹土中一、大開二方便一、列祖向二本分田地上一、直截二根源一。頭頭赴レ感随レ縁、一一転レ凡成レ聖、緇流多幸、宗風勃興。某、寛而栗愿而恭、涅不レ緇磨不レ磷、五登二班位一、珠照レ淵玉照レ山、四董二名藍一、雲従レ龍風従レ虎。目前融二去来今相一、胸中薫二戒定恵香一。鷲峰一枝奇芬、道果熟二霜露一、烏回百尋喬木、徳蔭遍二乾坤一。檀信葵傾、隣好金固。

という諸山疏を残している[61]。これによれば、運芳は五山叢林においてか五度にわたり禅寺の班位（知事・頭首など）の要職を勤め、さらに初開堂から万寿寺に住山入院するまでに四ヶ所の名藍大刹の住持を勤めたことが知られるが、その四ヶ寺とはおそらく妙光寺・常興寺・興国寺・興化寺のことを指しているものと見られる。

そして、運芳は最後にすでに述べたごとく東山建仁寺に陞

住しているわけである。すなわち、先に挙げた記事のほかにも、『五山住持譜』「建仁禅寺歴代住持位次」には、

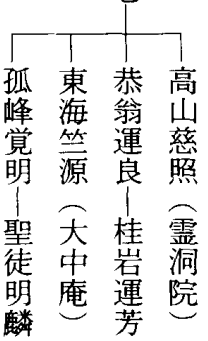
五十三、桂岩運芳。嗣二恭翁良一、法灯派。永和三年丁巳十二月十五日寂。室扁二天香一。入二牌常照院一。

と記されており、運芳が第五三世に陞住していることが知られる。運芳の前に第五二世となっているのは大覚派の頑石曇生（？―一三七六）であり、運芳の後に第五四世になっているのは一山派の蘭州良芳（弘宗定智禅師、一三〇五―一三八四）である。また第五五世に就任したのは夢窓派の義堂周信（空華道人、一三二五―一三八八）であり、『義堂和尚語録』巻一「住京城東山建仁禅寺語録」によれば、周信は康暦二年（一三八〇）四月四日に入寺している。[62] 運芳はこの建仁寺住持期に門人を中国に派遣し、大慧派の楚石梵琦より「法燈国師像賛」「興化開山恭翁良禅師像賛」および自らの「桂岩芳禅師像賛」を得ているわけであり、それは法燈派三代の顕彰を意図したものであったと見られる。そのほかに運芳はこの建仁寺住持期に法姪の蔵海無尽の依頼で法兄の絶巌運奇のために「長慶開基絶巌和尚賛」を撰している。

運芳が示寂したのは一般に北朝の永和三年（南朝の天授三年、一三七七）一二月一五日であったとされるが、「妙光寺歴世補稿」では前年の同月日とされていて一年の隔たりが存している。ここでは一応は一般に知られる永和三年の示寂としておきたい。ただし、このときの運芳の世寿や法臘などは定かでない。全身は建仁寺山内の常照院に塔され、その室号は天香と称されているが、およそ八〇歳前後であったものと推測される。『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禅寺」の「諸塔」には、

由良派。霊洞院〈高山禾上〉・大中菴〈東海禾上〉・常照菴〈桂岩禾上〉・慶光菴〈聖徒禾上〉。

と記されており、由良派すなわち法燈派の塔頭としては建仁寺山内に高山慈照（広済禅師、一二六六―一三四三）の霊洞院、東海竺源（法光安威禅師、一二七〇―一三四四）の大中庵、聖徒明麟の慶光庵とともに運芳の常照庵が存したことが知られ、これらを系図で示すと、



ということになろう。『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禅寺」の「住持位次」の運芳の頃によれば、常照庵ではなく常照院と記されており、その室の扁額を天香と称していたことを伝えている。

そして、この常照院には越中の長慶寺や興化寺などから一派の禅者が輪次によって住したとされるから、一時期、運芳

の門流は越中を中心にかなり隆盛し、輪住制によって塔頭常照院の堂宇を維持していたことが知られる。しかし、後に常照院は兵火に罹って毀かれ、江戸期の東晙の当時にはすでに廃絶して久しかったものらしく、『東山塔頭略伝』の「常照院」の項には、

開基、桂岩和尚。(中略)塔二于常照院一、室曰二天香一。此院、越中州長慶寺・興化寺等、一派輪次主レ之。後罹レ兵毀、廃絶已久。是故世次不レ詳、旧址今属二霊洞院一。

という記載が存している。このため常照院の世代などは詳かでなく、その旧址は霊洞院に属していたと伝えられる。霊洞院は恭翁運良と同門に当たる高山慈照の塔頭であり、(63)いわば建仁寺における法燈派の拠点ともなっていたため、常照院も廃絶後はこれに帰属したのであろう。

いずれにせよ、常照院は運芳の示寂して後、その門流の拠点となる塔頭として展開し、運良の系統すなわち仏林派全体の五山叢林進出の輪住地として維持されたものらしい。すなわち、この常照院には五山派に組みした越中の長慶寺や興化寺などから仏林派の禅者が交互に輪番のかたちで入院し、塔頭の維持に努めていたことが述べられている。(64)少なくとも常照院は運芳の後しばらくの間は仏林派の京都における拠点として維持され、越中の同派寺院と密接な関連を保ちつつ運営が計られていたことが判明するわけである。

建仁寺の世代などを見ても、その後に常照院から本山建仁寺に出世した仏林派の禅者の名も伝えられている。建仁寺世代としては第二〇三世の文苑等章と第二〇六世の自成秀瑛と第二六〇世の彝伯英倫などが運良の系統に連なる法燈派の人であったとされ、おそらく彼らは常照院から建仁寺に出世したものであろう。(65)ただ、その後、常照院は戦乱による兵火に罹って焼失して廃絶したことが記されており、ために歴住者の世代なども不明となったと伝えられる。また「旧址は今ま霊洞院に属す」とあるから、常照院が廃絶して後、その旧址は運良と同門に当たる高山慈照の塔頭である霊洞院に帰属するかたちになったことが知られる。おそらく仏林派の禅者は常照院が廃絶して以降は霊洞院を通して建仁寺ないし京都禅林と関わりを持ったものであろう。

ちなみに運芳は越中の砺波郡般若郷安川(いまの砺波市安川)にも般若山薬勝寺を開創して開山となっていることが知られ、(66)法嗣の玉岩周光(?―一四〇四)が薬勝寺第二世の法席を継いでいる。ただし、砺波市安川の般若山薬勝寺発行『薬勝寺誌』の「薬勝寺の歴代」によれば、運芳は実際に開山として薬勝寺に入院したのではなく、招請開山として法嗣の周光によって迎えられたものと見られている。(67)『薬勝寺誌』の「文書史料」に収録される文化三年(一八〇六)三月に薬勝寺から国泰寺御役寮に提出された由来文書によれば、

当寺宝珠山薬勝寺者、承暦三辰年開闢仕、真言宗ニ御座候。其時之本尊、弘法大師之作、薬師如来安置仕来り、延文三未年迄、歳暦凡弐百七十九年之間、密宗ニ罷在候処、同延文申年、増山城主、従京都建仁寺勅諡仏照禅師御請待在之、被致住職、数ヶ之庄園御寄附。夫ヨリ禅宗ニ罷成り、般若山薬勝禅寺与号シ、七堂伽藍御建立御座候処。

と記されており、記された年時がかなり後代になってしまうものの、そこには薬勝寺の開創に至る経緯が述べられている。これによれば、薬勝寺はもと宝珠山と号して真言宗に属していたが、北朝の延文四年（南朝の正平一四年、一三五九）に増山城主（神保氏か）が京都建仁寺より仏照禅師すなわち運芳を請待して住職となし、数ヵ所の荘園を寄付して般若山薬勝禅寺と改名し、七堂伽藍を建立したことになっている。ただし、すでに述べたごとく運芳が建仁寺の住持であった期間はこれよりかなり後のことであり、あるいは薬勝寺開創は運芳の興化寺住山期と関わる活動であったのかも知れない。ちなみに薬勝寺本堂の開山堂には南北朝末期頃に刻まれたと見られる運芳の木造坐像が残されており、厳しい禅僧としての往時の運芳のすがたを目の当たりに現今に伝えている。[68]

ところで、運芳について記された史料では明確でないが、薬勝寺の文書などによれば、運芳は示寂して後に仏照禅師という勅諡号を朝廷より賜っていることが知られる。仏照禅師といえば、一般には南宋初中期に活躍した大慧派の拙庵徳光（東庵・仏照禅師・普慧宗覚大禅師、一一二二―一二〇三）や鎌倉時代に活躍した聖一派の白雲慧暁（仏照禅師、一二二八―一二九七）などが有名であるが、この記載によって運芳にも仏照禅師という勅諡号が存したことが知られるわけであり、薬勝寺では運芳のことを「開山勅諡仏照禅師桂岩運芳大和尚」と尊称している。[69]

すでに述べたごとく運芳は薬勝寺に勧請開山として迎えられているわけであるが、実際には法嗣の玉岩周光が開創して自らは薬勝寺の第二世となっているものらしい。『薬勝寺誌』の「薬勝寺の歴代」によれば、第二世の周光は「前伝燈寺」の肩書きを有し、応永一一年（一四〇四）八月一四日に示寂したことが伝えられている。[70] おそらく周光は運芳に参学してその法を嗣ぎ、実際に薬勝寺を開創して師の運芳を開山に勧請しているものと見られるが、「前伝燈寺」の肩書きからすると、あるいは伝燈寺の前住位になっているのかも知れない。

さらに玉岩周光の後にその後席を継いで薬勝寺の第三世となったのは文坡祖広（？―一四九七）であるが、先の「薬勝寺の歴代」によれば、祖広は「前国泰寺二十世」の肩書きで薬勝寺の第三世を継いでおり、実際に国泰寺の第二〇世となっている。ところが、祖広が示寂したのは明応六年（一四

九七）一〇月二〇日とされ、周光と祖広にはかなりの年代的な開きが存するのであり、どうしても両者が嗣法関係にあるとは見がたいのである。

国泰寺に所蔵される『法燈下清泉派法継図』や『国泰歴代法脈経図』などによれば、祖広は国泰寺の慈雲妙意の系統に連なる北嶺雲祥という人の法を嗣いだ禅者とされている。おそらく周光が示寂して後、薬勝寺は一旦は荒廃したものと見られ、数一〇年という歳月を経て国泰寺第二〇世の肩書きで祖広が入山して伽藍を再興しているのであろう。[71] この祖広より以降、第一三世の澄月僧精（？―一六一五）に至るまで薬勝寺は国泰寺歴代住持の隠居地となっていたとされる。祖広はさらに越中の徳方（いまの砺波市徳方）に高慶山宝念寺を開山しており、[72] 文化三年の「薬勝寺由来」によると、徳方村の宝念寺のほかにも安川村の透関寺・普門寺・止関寺も祖広の代に建立されたと伝えられている。[73] ただ、これらの禅刹はいずれも薬勝寺が国泰寺派に転じて以降の開創であることから、薬勝寺の塔頭寺院として機能していたものと見られるものの、運良の門流とは直接に関わっていないことになろう。近年まで伽藍の存した宝念寺は別として、透関寺・普門寺・止関寺の三ヶ寺はともに廃絶して久しいため、その詳細などについては定かでない。

また運芳には薬勝寺の玉岩周光のほかに主に京都禅林で活躍した法嗣として岳雲という禅者が存したことが知られている。[74] すなわち、先の白石芳瑠「妙光寺歴世補稿」によれば、

二三25　岳雲　×桂岩　〔越雪集〕

とあり、京都の妙光寺の第二三世または第二五世に住持した人として岳雲という禅者がおり、法諱は定かでないものの、この人が運芳の法を嗣いだ高弟であったことを伝えている。[75] この点は実際に曹洞宗宏智派の元方正楞が『越雪集』「諸山」において、

岳雲住二妙光一。

舜何人禹何人、非レ不レ能也。夷則可恵則可、殆庶幾乎。苟微二前脩勇為一、争得二後学解レ惑。某、法筵周篋、籌室夏璜。聞二寧道者之風一、人咸有レ称二清白一、承二無門師之後一、公則不レ忝二曾玄一。将二謂墜緒茫々一、載瞻二余祐綽々一。南涯挙逸、漏二礼羅一者其誰、北岳勒移、洗二濫巾於斯日一。桑楡翳而将レ暮、松栢凛乎独寒。汝穎之士如レ錐、宜レ利二我道一、秦韓之地若レ錦、有レ光二于隣一。

という諸山疏を残していることによってさらに詳しく知られる。[76] 南宋代の開福道寧（寧道者）や無門慧開の系統を受ける法燈派の岳雲が妙光寺に住したことが判明する。

また、いま一人、運芳と関わりが存する禅者として善従という人の存在も知られる。すなわち、先の乾峰士曇の『乾峰和尚語録』四「偈頌」には、

送二善従禅人之二常興一。

積善従来衆福基、常興禅社展二宗枝一、東山七葉敷栄日、聳二動西方鷲嶺時一。

という偈頌が存しているが、(77) これは運芳が常興寺に住した際に門人の善従が運芳の下へ赴くのに際して士曇が与えたものらしい。「東山七葉」とか「西方鷲嶺」といった表現が見られるから、善従が法燈派に属する禅者であったことは疑いなく、おそらく運芳に参学していた門人であったと見てよいであろう。

(3)呑像運光（仏心円成禅師、？―一三五一）

法諱は運光、道号を呑像または呑象と称している。郷関や俗姓などについては定かでない。運光は運良の法を嗣いで後に越中蓮華寺の開山となった禅者であるが、すでに述べたごとく運良が示寂する際の消息として、運良の「行状」や「行実」には、

預嘱二光侍者一〈蓮華開山呑像和尚〉曰、汝護二我舎利一、其計二若干闍維烟気所一及、得二五色舎利一。果如レ所レ言。

とあり、同じく「塔銘」にも、

闍維後、其徒光侍者、収二拾設利一、蓋順二師遺命一也。塔号二大光一、室扁二常寂一。

と記されている。これらによれば、運良が暦応四年（一三四一）に示寂するに際して侍者であった運光に後事を付した記事が存しており、運光が運良の晩年にかなりその信認を得ていたことが知られる。運良は示寂に臨んで運光に「汝、我が舎利を護れ、其れ若干の闍維の烟気の及ぶ所を計れ、五色の舎利を得ん」と告げたとされ、闍維（火葬）の後、果たして運良のことばのごとく五色の舎利を得たため、運光は遺命に順って舎利を収拾し、大光塔を建て常寂室を築いたというものである。

運良の示寂して後のことと見られるが、運光は越中守護の名越時有が越中婦負郡の長沢（いまの婦中町長沢）に開創した大乗山蓮華護国禅寺の開山に招かれたと伝えられている。(78) その後、蓮華寺は諸地を転々として現在は富山市梅沢町に存しているが、寺所蔵の「蓮華寺過去帳」や歴住の位牌など寺伝によれば、

開山、瑞応敕諡仏心円成禅師、呑象運光大和尚。観応二年十月七日。

と記されている。これによれば、運光の肩書きに「瑞応」と表記されているから、運光がその生前に加賀の伝燈寺に住持したことが存したようにも解されるが、これはおそらく単に伝燈寺の系統すなわち運良の門流に属していることを意味しているにすぎないようである。(79) この記載によって運光が示寂したのは北朝の観応二年（南朝の正平六年、一三五一）一〇月七日であったことが知られるが、残念ながら運光の世寿や法

臘および生前の具体的な活動のさまなどは何れも定かでない。ただ、師の運良が示寂してよりわずか一〇年余を経た時期でもあることから、運光はそれほど高齢に及ばずに世を去ったものと見られ、そのために法弟の天外運義が後席を継いで第二世に迎えられているもののようである。さらに注目すべきは運光にも仏心円成禅師という勅諡号が存しており、何らかのかたちで朝廷ないし幕府とも関わっていたのかも知れない。

蓮華寺は運光が示寂して後、法弟の天外運義を経てさらに蒙庵運聡へと受け継がれている。しかも蓮華寺の住持には第一八世の雲谷禅龍(?―一六一九)に及ぶまで「前瑞応」の肩書きが存しており、伝燈寺と密接な関わりをもって展開していたことが知られる。[80] また第二世の運義が伝燈寺第三世に就いているほか、第四世の華岳自英(花岳白英とも、?―一四一八)が伝燈寺第七世に、第六世の龍門一登(?―一四三六)も伝燈寺第八世に就いており、その後も第九世の太伯友梅(?―一五一七)と第一二世の文裔祖鳳(?―一五三二)がそれぞれ伝燈寺の第二一世と第二四世になっている。このように少なくとも蓮華寺は江戸初期まで伝燈寺と密接な連携を保ちつつ、運良を派祖とする仏林派の法輪を転じていたことが知られる。

(4)至庵綱存(円通仏眼禅師、?―一三五七)

さらに運良のいま一人の法嗣である加賀伝燈寺の至庵綱存については、今日、その足跡をほとんど明らかにし得ない。しかしながら、運良が開創した伝燈寺の後席を継いで第二世となっていることが知られるから、綱存は運良の後を受けて拠点寺院を任されるだけの力量を備えた禅者であったことは疑いなかろう。『加賀志徴』巻一二「河北郡小坂郷」の項には、

伝燈寺石地蔵。地蔵応験新記に、(中略)伝説に云、右山賊は名を悪四郎と云、仏林恵日禅師の弟子と成り、至庵と称す。一寺を建立し、禅栖院と云ふ。是伝燈寺二十一ヶ寺塔頭の一ヶ寺にて、後に金沢へ出づ、野田寺町禅栖院是也。

とあり、綱存はもと悪四郎と名乗る山賊で妻帯していたが、伝燈寺の石地蔵いわゆる身代わり地蔵の因縁で運良の弟子となったことを伝えている。[81] この伝承がどこまで史実を伝えているかは疑問であるが、綱存はおそらく加賀地内の出身で、運良の徳化に敬服してその門下に列した人であったものと見られる。

さらに綱存は運良が北朝の暦応四年(南朝の興国二年、一三四一)に示寂するとともに、その後席を継いで伝燈寺の第二世となっているものと見られ、その住持中にかつて運良が瑩

山紹瑾から授与された『一夜碧巌』などを法姪の蔵海無尽を介して大乗寺に返還したらしい因縁が存している。また綱存は北朝の文和三年（南朝の正平九年、一三五四）に伝燈寺山内に禅栖院という塔頭を開創しており、この禅栖院は後に金沢の泉野寺町に移転したことが知られているが、すでに廃絶して現今には伝えられていない。[82]

伝燈寺の「伝燈寺過去帳」の「七日」の箇所によれば、

当寺二世勅諡円通仏眼禅師至庵綱存和尚、延文二丁酉十月。

とあり、綱存は北朝の延文二年（南朝の正平一二年、一三五七）一〇月七日に示寂したとされている。ただし、このときの綱存の世寿や法臘などは定かでない。

さらに注目されるのが後に綱存に対して朝廷から円通仏眼禅師という勅諡号が下賜されていることである。[83] すなわち、高岡市太田の国泰寺には実際に「蔵人頭勧修寺晴秀奉口宣案」として、

上卿　勧修寺大納言

天文十四年九月十二日宣旨、

綱存和尚、

宜レ諡二号円通仏眼禅師一。

蔵人頭右中辨藤原晴秀奉。

という綱存に対する禅師号宣下の文書が伝えられており、これはもともと伝燈寺所蔵史料であったと見られている。[84] ただ、綱存が示寂して二世紀近くを経た天文一四年（一五四五）九月に至って綱存に禅師号が下賜されている背景は定かでない。今日、伝燈寺には本堂背後の裏山の地に「開山勅諡仏林慧日禅師」という運良の墓塔とともに、法嗣の綱存の墓塔である「開山仏眼禅師之塔」と刻まれた卵塔が残されている。墓塔自体は後代の再建であるものの、伝燈寺においては綱存の存在が運良とともに重視されていたことが知られる。[85] ただ、ここにいう「開山」という表現は判断しがたいが、あるいはかつて伝燈寺山内に存した禅栖院の開山祖師の意味なのかも知れない。

(5)天外運義（無外とも、慈照禅師、？―一三七一）

この人は法諱を運義、道号を天外または無外と称している。すなわち、伝燈寺の第三世となった禅者に無外運義があり、越中婦負郡長沢の大乗山蓮華護国禅寺の第二世となった禅者に天外運義が存しているが、ここにいう運義は同一の禅者であったものと見られ、「天」の字と無の別体である「旡」とを混用したことにちなむものであろう。[86] 運義が運良との間で如何なる機縁を持ったのかは定かでないが、綱存の後席を継いで伝燈寺の住持となったとされるから、おそらく綱存が延文二年に示寂するとともに運義が伝燈寺に入院しているものであろう。さらに運義はこれと前後してか同門の呑像運光

の後席を継いで越中長沢の蓮華寺の第二世にも就任しているわけであろう。この点は「蓮華寺過去帳」や歴住の位牌など寺伝においても、

前瑞応当寺二世久安開山敕諡慈照禅師天外運義大和尚。応安四年七月十六日遷化。

と記されており、運義について簡略な事跡が知られる。これによれば、運義は前瑞応すなわち伝燈寺の住持であったことや蓮華寺の第二世であったことが知られるが、そのほかに「久安開山」と記されており、久安寺という禅刹の開山にもなっていることが判明する。ここにいう久安寺とは具体的に何れの地に存した禅刹か定かでないが、おそらく越中国内に存した禅刹であって、蓮華寺の末寺か伝燈寺の末寺として機能していたものと見られる。[87]

伝燈寺の「伝燈寺過去帳」の「十六日」の箇所によれば、

当寺三世無外義大和尚、応安四辛亥七月。

とあり、運義が示寂したのは北朝の応安四年（南朝の建徳二年、一三七一）七月一六日のこととされるが、一説に七月七日であったとも伝承されている。蓮華寺の寺伝でも、同じ年の七月一六日に遷化したことになっていて、ともあれ一〇日あまりの日にちの相違が存している。「蓮華寺過去帳」によれば、「敕諡慈照禅師」とあるから、後に運義には慈照禅師という勅諡号が下賜されていることが知られる。

(6)蒙庵運聡（大陽禅師、？―一四〇二）

この人は法諱を運聡といい、道号を蒙庵と称している。「蓮華寺過去帳」や歴住の位牌など寺伝においても、

前瑞応当寺三世国分開山敕諡大陽禅師、蒙菴運聡大和尚。応永九年九月十八日。

と記されており、その簡略な事跡が知られる。一説に法諱を運聴と記している記載も見られるが、道号と法諱の関係はおそらく南宋代に杭州（浙江省）余杭県西北の径山興聖万寿禅寺に化導を敷いた臨済宗仏眼派の蒙庵元聡（一一三六―一二〇九）にちなむ命名であったと推測されるから、法諱は運聴ではなく運聡であったと解するのが正しいであろう。運聡も系字からして運良の法嗣であろうが、運良との因縁などはまったく定かでない。「前瑞応」とあることから、運聡は法兄の至庵綱存や天外運義の後席を継いで加賀の伝燈寺に入寺しているかのごとく解されるが、実際、今日の伝燈寺の世代には運聡の名は存していない。さらに運聡は運光や運義の後席を継いで越中の蓮華寺の第三世ともなっているが、その時期は運義が示寂した応安年間（一三六八―一三七五）の頃であろうか。このほかに「蓮華寺過去帳」には運聡に関して「国分開山」の肩書きが付されていることから、運聡は国分寺という禅刹の開山ともなっていることが知られる。ここにいう国分

寺とは定かでないが、あるいは越中国内に存した国分寺のことを指すのであろうか。[88] この国分寺もおそらく蓮華寺の末寺か伝燈寺の末寺として機能していたものと見られる。

運聡が示寂したのは応永九年（一四〇二）九月一八日のこととされるが、すでに運良が示寂して六〇年もの歳月が経過していることから、おそらく運聡はかなりの長命を保った人であったものと見られ、少なくとも八五歳前後にはなっていたものと見なければならない。また法兄の運義が示寂してより三〇年を隔てていることから、運聡は蓮華寺において久しい接化をなしていたことが察せられる。また「蓮華寺過去帳」に「敕諡大陽禅師」と記されていることから、運聡に対してもその示寂後に朝廷より大陽禅師という勅諡号が下賜されているらしいことが知られる。

伝燈寺と興化寺の変遷

加賀の伝燈寺と越中の興化寺については、運良の門流である仏林派全体によって維持されていることから、別個にその歴史的な変遷を記しておきたい。

はじめに加賀の伝燈寺についてであるが、この寺は運良から法嗣の至庵綱存へと受け継がれ、加賀における仏林派の拠点寺院として展開している。この寺の歴史的変遷については『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「伝燈寺の歴史」に比較的に詳しい考察が存している[89]ので、これに基づいて簡略に触れるに留めたい。

運良が開創して以降、南北朝の後期から室町期における伝燈寺については、文献史料がほとんど残っておらず、その詳細が定かでない。[90] 伝燈寺は興化寺よりかなり遅れて一五世紀末に至って十刹位に列しているが、富山市布市の太平山興国寺に所蔵される史料として、

当寺、紀州興国寺之列、明応七年三月四日、義材御判。右筆諏訪若狭守長貞、当寺使僧禅栖院元慶書記、同年三月十四日、於二越之中州放生津一御対面。

于レ皆当寺奉行宗廉首座、為二後証一誌レ之。

明応七稧戊午夷則初六日。

座元亀年玄寿。　妙光寺奉行慈光（花押）

座元化元守功（花押）

前住興国住山大用叟心沢（花押）　慈裔。

前住建仁曇蕚叟桂瑞（花押）　座元梅屋周蘂。

という古文書が伝えられている。[91] 明応七年（一四九八）三月にこのとき放生津に亡命していた足利義材（初名は義稙・義尹、一四六六―一五二三）の御判御教書によって紀伊の興国寺の列に認められたことが知られ、それは禅林十刹の列ということであったされる。このときの伝燈寺の住持は興国寺の前住で伝燈寺第二〇世の大用心沢（？―一五一二）であったこ

とが知られる。その後、征夷大将軍に復位した足利義材の周旋によってか、永正一二年(一五一五)に伝燈寺は後柏原天皇(一四六四―一五二六、在位は一五〇〇―一五二六)から勅願寺の綸旨を得ている。[92] この間、伝燈寺は多くの塔頭寺院を抱える大禅林として機能していたものらしく、七堂伽藍のほかに、往時には普明庵・華蔵院・秋月院・金剛院・禅栖院・龍頭軒・至道庵・覚意軒・遠江院・静隠軒・正等軒・泰祥軒・霊光院・見中庵・泰久院・高松院・鳳翔院・快心院・妙性庵・内証院・養源院といった子院が存したことが伝えられている。[93]

また元亀元年(一五七〇)五月一四日には一向一揆勢力に攻められた加賀守護の富樫晴貞(晴泰、?―一五七〇)が嫡子で大乗寺塔頭の高安軒に住していた祖雲(俗名は富樫晴友)とともに伝燈寺において自刃したと伝えられているから、[94] 伝燈寺も戦国末期には一向一揆などによって伽藍がかなり荒廃していたものと見られる。それでも伝燈寺は江戸初期に第三六世の魯雲索(?―一六一五)に至るまで仏林派の禅者が伽藍を相続維持して住持を勤めていたことが知られている。第三七世の賢英士哲(?―一六四四)が他派の禅者として入山しており、一旦は仏林派の三峰宗祝(?―一六五三)が後光明天皇(一六三三―一六五四、在位は一六四三―一六五四)の綸旨を得て禅栖院より伝燈寺第三八世の住持に任命されているが、仏林派の衰微は如何ともし難く、その後、大応派(妙心寺派)の千岳宗仭(一五八〇―一六六三)が第三九世として入院してより妙心寺派に移行して今日にまで及んでいる。

つぎに越中放生津に存した興化寺についてはどうであろうか。興化寺はすでに廃絶して久しいことから、その変遷の過程などは明確ではないが、幸いに『新湊市史』に「興化寺とその住持たち」の考察が存し、また広瀬良弘氏に『禅宗地方展開史の研究』「五山系禅院の隆盛と法燈派の展開」に「興化寺住持およびその交流者一覧」として諸史料を駆使して判明した歴住者に関する研究が存しているので、これらに基づいて仏林派の展開を中心にした部分のみに関して簡略な事跡を考察しておくことにしたい。

すでに述べたごとく加賀の伝燈寺が仏林派の拠点寺院としての面目を保って比較的に久しく独自の展開を計っていたのに対し、越中の興化寺の場合はやがて十方住持制の禅刹となり、京都禅林との関わりを強めて官寺としての道を歩んでいる。ただ、運良が開創した当初においては、興化寺も林下の禅刹としての面目を保ち、同流の慈雲妙意が開いた近隣の摩頂山国泰寺や能登羽咋に存する曹洞宗の洞谷山永光寺などとも交流を保って地方展開を図っていたもののようである。ところが、運良の法嗣である桂岩運芳は興化寺に住持した後、かつての京都禅林における研鑽を背景としてか中央の名刹に

遷住しており、興化寺はしだいに京都建仁寺などとの関係を親密にしていくことになる。

北朝の延文五年に運良に対して後光厳天皇より仏恵禅師の勅諡号が下賜されているのも、おそらく運芳ら興化寺から京都禅林に進出した人々による活躍を背景にしているものと見られ、興化寺は仏林派の禅者たちの越中における拠点として維持継承されていくわけである。運芳のほかには法姪の蔵海無尽も興化寺に住持しているらしいが、初期の住持の変遷については明確でないところが多い。わずかに応永九年三月二二日に運良の開山塔梁銘が天祥一麟によって撰せられており、このとき塔を造立したのが貞叶という人で、また運良の墓塔を管理していた守塔比丘として良昭という禅者の名が知られている。貞叶や良昭らはおそらく運良の門流に連なる仏林派の人であったと見られ、こうした仏林派の禅者たちによる顕彰運動の成果がやがて応永一六年（一四〇九）に運良に対して重ねて後小松天皇から仏林恵日禅師の勅諡号が下賜されている前提になっているものと見られる。

曹洞宗宏智派の元方正楞の『越雪集』の「同門疏」や「山門疏」によれば、義仲・商岩佐・円珠照などの禅者が一五世紀の中葉頃に興化寺に入院したことが知られているが、すでに仏林派の禅者のみに限定されず、十方住持制の下に五山派の禅者が住持として迎えられている。もちろん、仏林派の禅者が多く入院しており、等章文苑・要才梁・蘊秀英珍（瓊林）・英倫彝伯などは興化寺に入院する前に長慶寺住持を勤めており、また要才梁と芳中序仁（方中とも）は加賀の妙雲寺の前住であったことが知られている。[95] さらに興化寺の住持を勤めて後に京都建仁寺に陞住している禅者としては、等章文苑が第二〇三世に、秀英自成が第二〇六世に、英倫彝伯が第二六〇世にそれぞれ就いていることが知られている。その後、戦国末期まで興化寺は七堂伽藍が整った十刹位の禅刹として越中に君臨していたらしいが、やがて廃絶して現今に伝えられていない。[96]

以上、述べてきたごとく運良および仏林派の禅者が開創した加賀・越中の禅刹は多く五山叢林に組み込まれて展開し、とくに中世末期には興化寺や長慶寺などが中央禅林と密接な関わりを持っていたことが知られているが、これらの禅刹はやがて廃絶して後世に残ることがなかったのである。

これに対して、仏林派の法統を後代に維持して今日に伽藍を伝え得たのは伝燈寺と蓮華寺であるが、この二ヶ寺も法系譜の上ではすでに運良の系統そのものではない。江戸中期には仏林派は衰微し、やがて妙心寺系あるいは国泰寺系に吸収されているのであって、希有にして歴史の証人として堂塔が現今に残されている。

おわりに

以上、鎌倉末期から南北朝初期にかけて活躍した臨済宗法燈派の恭翁運良についてその生涯を逐一に窺ってみたわけであるが、運良には瑩山紹瑾およびその門下の曹洞禅者らとの関わりがかなり濃厚に存し、その活動の地も大乗寺・永光寺・総持寺の曹洞宗教団とほぼ教線を重ねる加賀と越中であり、京都や鎌倉の中央五山叢林とも直接には関わらないで北陸の地にその後半生を終えていることは特徴的である。

運良の参学の特徴としては、当代に名ある禅者や教僧に学んでいる点であり、また臨済・曹洞の別を超え、禅と教の別も問題としていない点であろう。運良は自分に素直な性格であったものと見られ、物事を真正面から捉える人であったといってよい。そのためにときとして他者との間で確執が生まれ、妥協を許さない性格から抗争に巻き込まれることも存したわけであるが、それでも信念に貫かれた生涯には輝かしいものすら感ぜられる。

運良に関する逸話には地方に活動した禅僧の持つ威厳に満ちた生きざまが窺われ、行動力に満ちた中世禅者の面影を如実に知ることができる。それは在地の神々を神とも思わぬようでいて、実は神をも自らの禅に包含せんとする意気込みに貫かれている。地元の諸信仰に対して厳然たる態度で臨む運良のすがたは、しだいに人々の関心を引き、やがて諸禅刹の開創へと連なっていったわけである。運良は加賀・越中に生きた民衆を相手に、彼らの要求に応えるかたちで禅風を挙揚せんとしている。運良が禅刹を加賀・越中に創建していく過程を見ると、必ずしも最初から有力な檀越のみによって伽藍を建立するというよりも、在地の人々の帰依が募ってしだいに大伽藍へと拡大していく面が顕著である。

ただ、運良の性格は一面で他と対峙しやすいものであったらしく、その行動は誤解されやすい面も存したことは否めない。それは運良がものごとに対していい加減な妥協を許さない厳峻な人物であったことを示すものであり、禅僧としてはどちらかというと、中央五山叢林の臨済禅者というより、在地の土豪・農民層に根を下ろした林下の曹洞禅者らのごとき気風をすら漂わせた人であったといえよう。

運良の活動は諸方面にかなり広範に及んだようであるが、いま一つ時流に乗れなかった感がある。伝燈寺を除いて開創寺院のほとんどがすでに廃絶していることにもそれが窺え、結局のところ、運良の門流は大きく展開することなく、その消息はすでに歴史の彼方に埋没したかの感を抱かしめる。運良その人のカリスマ性がきわめて大きかったのに対し、門流の人々がいま一つ結束し切れていなかったのではなかろうか。

同じ地域に能登の永光寺や総持寺を中心とする曹洞禅者が進出躍進し、その組織力を背景に多くの伽藍を建立して勢力を伸ばしている。曹洞宗は体制づくりに邁進し、個人の力量より組織力で飛躍的な展開を図っているが、それはすでにずば抜けた才能を発揮する禅者を必要としなくなっていく時代性を捉え、新たな要求に応えるだけの雑多な諸信仰や葬送儀礼などを取り入れた融通性を備えていたことによるところが大きい。また人材育成の面においても運良は自ら接化指導したこともある曹洞宗の明峰素哲や峨山韶碩らに座を譲ったかたちであり、永光寺や総持寺などは布教に積極的で、同じ方向性を目指したはずの運良の門流はこれに乗じ得なかった感すら存している。

もっとも、放生津の興化寺などはやがて運良の門流として京都の五山叢林の機構の中に取り入れられて勢力の維持を図ろうとしており、その系統は一時期かなり盛んであったようであるが、戦国末期における五山派の衰頽と命運を共にしてしまっている。これは地方展開を目指した運良の方向性とは別になってしまった例といってよかろう。幸いに運良と親しかった同じ法燈派の慈雲妙意の系統が中央五山とは別個に国泰寺派を形成し、越中における臨済宗の主流として現今に及んでいる。妙意は運良と似たような活動をなしているが、運良よりも着実な僧団運営に長けていたのかも知れない。

註

(1) 古代において御史はもともと天子の秘書官で録を記し、法令を授けることを司る役であったが、後代には官吏の不正を暴いて取り調べる官となり、その官署を御史府といい、長官を御史大夫と称している。

(2) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』によれば、江戸期の伝燈寺関係史料になると、享保一〇年（一七二五）に第四二世の光天覚盤が記した「覚書之事」（伝燈寺来歴品々ニ付覚書）に「当寺開山恭翁運良大和尚者、後醍醐天皇御帰依之師ニ御座候ニ付、遷化之後、延文五庚子年、従二後光厳院一、勅諡仏恵禅師ニ被レ遊被レ下候。又其後、応永十六己丑年、従二後小松院一、勅諡仏林恵日禅師ニ被レ遊被レ下」とあり、また『稿本金沢市史社寺編』に載る「文化三年由緒書上」（瑞応山伝燈護国禅寺由来就御尋申上候）にも「当寺儀者、日本名藍之図ニ相見江候通リ、寺格者甲刹之位ニ御座候。後醍醐天皇・後小松院・後柏原院三朝之勅願寺。開山運良和尚、勅諡仏林恵日禅師。花園院延慶元戊申年初開堂之道場ニ而御座候」と記されているなど、伝燈寺が後醍醐天皇によって勅願所とされたことを伝えているが、運良の伝記史料では後醍醐天皇との関わりなどは何ら記されていない。

(3) 神鬼とは鬼神と同義であり、目に見えない超人的神秘を有するものであり、人間よりもすぐれた存在をいう。善人の霊を神といい、悪人の霊を鬼という。ここでは運良が不動明王の姿を見た故事と悪鬼による疫病を撃退した故事などを指しているものと見られる。

(4) 解慧三昧ということばは明確ではないが、解とは解脱・悟りのことであり、慧とは智慧・悟りのことであるから、解慧は智慧あるいは悟りを意味していよう。三昧は三摩地とも音写し、定・等持・正受と訳されるように、心が静かに統一さ

れて安らかになっている状態であり、禅定・坐禅をいう。したがって、解慧三昧とは定慧が均等に調ったありようということができよう。

(5) 「師資叮嚀」と「賓主酬対」の表現は、運良が門下との間で綿密な学人接化をなしていたことを形容したものである。「生平の禅坐」とは平生の坐禅のことであろうし、経行とは坐禅の際に僧堂内の牀間を徐行緩歩する法のことであるが、これらは運良が如何に坐禅や経行といった叢林における辦道修行を重んじていたかを伝えるものであろう。

(6) 人事とはいまは叢林で行われる礼式、あるいは慶弔の挨拶や寒暖の問候などのことをいうのであろう。また警策とは警覚策励すること、修行精進を励ますことであり、運良が修行僧の懈怠を戒め、惰眠を覚醒させんとしたことを指すのであろう。

(7) 伝燈寺保存会編『加賀伝燈寺—歴史資料調査報告—』の「第三章、美術・工芸資料」には、伝燈寺に所蔵される運良の頂相について、

恭翁運良頂相　紙本著色　金沢市指定文化財　一幅
縦八九・三センチ、横四〇・七センチ
江戸時代初期

伝燈寺の開山である。左斜めを向き、法衣に袈裟を着し、右手に払子を執り、法被を掛けた曲彔に坐す。曲彔の前には沓床があり、沓が置かれる。手慣れた描線により気骨のある顔貌の表現がなされ、その個性をよく表している。また墨染の法衣に対して、金泥を多様した金襴の袈裟の表現となっており、画面に華やかさを増している。賛はない。

という解説を付している。江戸初期に書された頂相と推定しているが、おそらく古く伝燈寺に残されていた原本を忠実に複写した画像であろう。

(8) 『加賀伝燈寺—歴史資料調査報告—』の「第三章、美術・工芸資料」には、伝燈寺所蔵の運良の木像坐像について、

恭翁運良像　木造彩色　一躯
像高九七・〇センチ、坐高六一・〇センチ、頭頂～顎一九・五センチ、耳～耳一四・八センチ、面幅一一・五センチ、面奥一六・五センチ、肩幅三六・〇センチ、肘張四四・五センチ、背～胸前二三・〇センチ、膝張五〇・〇センチ、裾張五九・五センチ、背～膝前四一・〇センチ
江戸時代前期

細目の顔、小さな眼、こけた頬、口元の皺など穏やかな中にも気骨ある老相に表わす。法衣に袈裟を着し、禅定印を結び趺坐する。

寄木造・彩色・玉眼嵌入。頭部は前後二材矧ぎとし、首を襟際で躰部に枘差しとする。躰の根幹は前後二材矧ぎで、両肩から躰側部に各一材を矧ぐ。両膝部は横木一材を寄せ、以下、裳先・両袖前膊部・両手先を寄せる。全体に漆錆をつけ、法衣を朱彩色、袈裟は胡粉彩色金泥描きとし華麗に文様を表わすが、多くは剥落する。

という解説が付されている。この運良像も江戸前期の作とされるが、その特徴的な表情などから、運良の生前のすがたを刻んだ原刻木像などをもとにして模刻された開山像であったものと見られる。

(9) 昭和三年(一九二八)に刊行された駒澤大学図書館編『禅籍目録』では運良の著述について、

×血脈相承説　運良(恭翁)
×見性鈔　運良(恭翁)
×正法眼蔵語　運良(恭翁)

×禅戒正伝　運良（恭翁）
×仏林慧日禅師語録　運良（恭翁）
とあり、何れも所在が確認されていないものとして五種の禅籍の名を挙げている。ただし、この中で『血脈相承説』と『禅戒正伝』は一書を誤って二書と解したものである。

(10) 『国書人名辞典』第二巻の「恭翁運良（きょうおううんりょう）」の箇所では、
僧侶（臨済）〔生没〕文永四年（一二六七）生、暦応四年（一三四一）八月十二日没。七十五歳。〔名号〕法諱、運良。道号、恭翁。諡号、仏慧禅師・仏林慧日禅師。〔経歴〕初め出羽玉泉寺の了然法明に師事、のち能登羽咋永光寺の瑩山紹瑾に参禅し、さらに無本覚心につきその法を嗣いだ。やがて瑩山の命で加賀大乗寺住持となった。退院後も真光寺住持、加賀伝灯寺開山となる。他に興禅寺、越中興化寺や兜率寺の開山にもなった。
〔著作〕見性鈔　正法眼蔵語　禅戒正伝血脈相承説　▽仏林慧日禅師語録
〔参考〕本朝高僧伝　延宝伝灯録　大日本史料六ノ六
と記されており、運良の簡略な足跡と著述・語録の存在を伝えている。ただし、それらの所在や現存の有無などは明確にされていない。

(11) 中世の『正法眼蔵』の注解・末疏としては、古く京都永興庵に在った道元門下の詮慧・経豪による『正法眼蔵聞書』と『正法眼蔵抄』が存し、永平寺第五世中興の義雲（一二五三―一三三三）に『正法眼蔵品目頌』が存している。また太源派の太容梵清（？―一四二七）も梵清本にちなむ『正法眼蔵綱目』を残している。いずれにせよ、きわめて限られたものしか存しておらず、運良のそれが道元の『正法眼蔵』と何らかの関わりが存する著述であるならば、興味深いものがあろう。

(12) 瑩山紹瑾の『秘密正法眼蔵』一巻は永光寺に写本が所蔵されており、『曹洞宗全書』「宗源下」に所収されている。また太源派の傑堂能勝（一三五五―一四二七）が拶語・代語を付した『秘密正法眼蔵注解』も『続曹洞宗全書』「注解一」に所収されている。

(13) 中世禅林における禅戒血脈相承に関する著述としては、古く黄龍派の明庵栄西（千光法師、一一四一―一二一五）が撰したと伝えられる『受禅戒作法』が存しており、運良と同時代に活躍した聖一派の虎関師錬（海蔵和尚、一二七八―一三四六）にも『禅戒規』（詳しくは『禅門授菩薩戒規』）一巻が存している。また曹洞宗では太源派の梅山聞本（一三三九？―一四一七）に『梅山和尚戒法論』が伝えられている。

(14) 『永平開山道元和尚仮名法語』二巻は、向上・向下・理智・機関・大疑・大悟・大用・大徹・本来面目・見性・得法・無相・無念・教内・教外・示出家之人事・示僧俗因果事・示一無為人事という一八項目について垂誡したものであり、道元の真撰と伝えられているが、今日では道元禅からはほど遠い見性待悟的な内容からしてそのほとんどは道元の真説ではないとされている。

(15) 運良に先立つ仮名抄物としては、詮慧・経豪による『正法眼蔵聞書』と『正法眼蔵抄』などもそれに属しようが、運良の『仮名見性抄』はその先駆的な著述ということになり、現存していればきわめて貴重な禅籍であったはずである。

(16) この開山運良の真跡について記しているのは伝燈寺第三八世の三峰宗祝（？―一六五三）が退隠して後に無住となったときの文書で、もとの塔頭禅栖院が什物類を管理していた頃のものとされている。しかも『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』「文献史料」の項目（九九頁）としては「伝燈寺開山

恭翁運良画賛写」とあることから、もともとこの真跡は運良が自らの頂相に対してなした自賛であったものらしい。

(17) 二番目の自賛は運良が示寂に臨んで示した遺偈と類似しており、わずかに第三句に字句の相違が見られるにすぎない。また最初の自賛の「物々是れ仏祖」とは生滅変化する事象がすべて仏祖の語る真理であることを表現しており、両自賛は共におそらく運良晩年の姿を詠じた作であったものと見られる。

(18) 『鷲峰余韻』の「鷲峯開山法燈円明国師行実年譜」の「庚申、正元二、四月十三日文応改元」の項によれば、慧開が晩年にあたる南宋の景定元年(一二六〇)に日本の覚心に相伝したものの一つに「東山七葉図」一本が存している。ただし、「法燈心和尚」とあるから、現存する「東山七葉頂相宗派之図」自体はおそらく覚心が慧開から相伝されたそのままではなく、後に覚心の姿を付して日本において描かれた図が覚心から運良へと付され、さらに覚心に「法燈」の勅号が与えられて後に重ねて描かれて完成したものであろう。

(19) 『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』の「文応元年」の箇所に、

七葉図者、自二五祖演一至二黄龍門〈無門〉和尚一、是六葉也。的々相承、以二日本国覚心和尚一為二七葉一者也。無門自述二作這図一而鏤レ石以印二写之一、伝二付于日本国覚心和尚一。然後行二宋天下一。無門信物之目録云、東山七葉図一本、乃正伝宗派、是吾山秘訣也。為二師法孫門葉一者、能可二密知一。

と記されている。無門慧開が自らの系統の正統性を五祖法演に求め、大慧派や虎丘派とは別系統の正系を主張せんとしたものであろう。ただし、慧開の『無門開和尚語録』ではこうした意識は明確に記されていないが、覚心の個人的な伝記史料のみでなく、『元亨釈書』巻六「釈覚心」の章にも、慧開がその晩年に遠く中国から「七葉図」一鋪その他を日本の覚心に贈ったことが記されている。国泰寺に所蔵される「東山七葉頂相宗派之図」は正面上段の左右にインド・中国における禅の法系として臨済宗の嗣承が記された後に、「東山七葉頂相宗派之図」と横一行の墨書きがあり、その下方の中央に五祖法演が左を向く像が描かれ、その左右に各六行の賛文が書かれている。二段目よりは二人づつ向き合うように配置されており、二段目には右に「開福寧和尚」と左に「月菴果和尚」の像が、三段目には右に「老衲証和尚」と左に「月林観和尚」の像が、四段目には右に「無門開和尚」と左に「法燈心和尚」の像が描かれている。しかも鑑定では縦八九・五センチ、横三八・四センチで、南北朝から室町初期の作とされており、しかも「法燈」の名が記されていることから、覚心が運良に授けた直筆というより、これを複写したものではないかと見られている。詳しくは『加賀伝燈寺—歴史資料調査報告—』の「美術・工芸資料」の国泰寺の「東山七葉頂相宗派之図」の解説(二七頁〜二八頁)を参照。

(20) 「当寺開山伝記之内ニモ有之」とあるのは、運良の「塔銘」に「東山祖図、聯二彼五葉一、南方仏法、分二此一枝一」と記されていることを指しているのであろう。しかも「五葉」とあるから、元来、覚心から運良に相承された図は開福道寧から無門慧開に至る五代の祖師を描いたものであったと見られ、これが後に改めて道寧の師である五祖法演と慧開の嗣である覚心という両祖を加えて七祖として並べ変えて作成されたものではなかろうか。

(21) 従来、伝燈寺の什物であったはずの「東山七葉頂相宗派之図」がなぜ国泰寺に保存されるに至ったのか、その経緯は定かでない。ただし、伝燈寺中興第四世の光天覚盤が「七葉頂相之由来」を記しているから、少なくとも覚盤の当時は「東

山七葉頂相宗派之図」はいまだ伝燈寺の什物であったことが知られ、覚盤が示寂した元文六年（一七四一）より以降に伝燈寺から流失して国泰寺の所蔵となったものであろう。

(22) この点は『南院国師語録』巻下に付録される「敕諡南院国師規菴和尚行状」にも、

師在二恵日一時、雅聞下紀州鷲峯心地和尚遠伝二東山七葉之図一、高唱中無門奇絶之道上、策レ杖渉レ険、歴扣参請焉。所以示寂則祭奠、有下祖図生二桑梓一、未レ倚二玉青葱一、自二従一笑莫逆一、也解二千里欽風一之句上。

という記載が存しており、仏光派の規庵祖円（南院国師、一二六一―一三一三）の記事としても興国寺の覚心に「東山七葉之図」が存したことを伝えており、祖円は覚心が盛んに無門慧開の道を唱えているのを聞いて興国寺に投じたとされている。

(23) 国泰寺に所蔵される「大日本国賀州路瑞応山伝燈禅寺開山仏林慧日禅師行状」においては、

歿後、侍真号二霊岩一、後夜偶怠二香火一。祖師定中高呼二侍真一。蒼皇而趨、点レ灯供レ香、祖乃劈脊一棒、棒痕終身不レ滅。

とあって、「侍真」の語句より以降に「霊岩と号す、後夜、偶たま香火を怠る。祖師の定中より高く侍真と呼ぶ」という文章が補われている。これによれば、この侍真は道号を霊岩といい、ある日の後夜（早朝）に香火を怠ったとき、祖師運良の坐像から高声に「侍真よ」と呼ぶ声が轟く。侍真の霊岩が慌てふためいてその場に至って灯を点して香を薫ずると、祖像が一棒を喰らわし、その跡が生涯にわたり消えなかったことを伝えている。この一段の脱所を補った方が流れとしては自然であり、侍真の名も霊岩と明確に知られ、おそらく運良の門人の一人に列していた禅者であろう。

(24) 『禅林象器箋』第七類「職位門」の「侍真」には、

忠曰、侍二祖塔真影一者、曰二侍真一。即塔主也。真者祖師形像也。

と記されている。侍真とは開山の塔（墓所）または尊像すなわち木像や頂相（真影）に給仕する役職であり、主塔比丘・主塔侍者・塔主とも称される。

(25) 『続本朝画史』は檜山義慎が撰したもので、一名を『皇朝名画拾彙』ともいう。運良の記事は『日本書画苑』第二に所収される『続本朝画史』の当該箇所（三六九頁）から採用したものである。檜山義慎は江戸後期の鑑定家として知られ、字は徳忠、号を坦斎と称している。采秋園・磐松軒とも号し、江戸深川六軒堀に居住して書画鑑定を業としたとされる。天保一三年（一八四二）九月一六日に七三歳で没している。著述としてはほかに『花押譜』『新撰花押集』『本朝画史遺伝』などが存している。

(26) ちなみに運良に若干ながら遅れて加賀や越中に活動し、やはり不動明王像などを描くのを得意とした禅者に臨済宗一山派の朴堂祖淳（朴庵とも、一三八一―一四六七）が知られており、久保尚文「朴堂祖淳について―室町期禅林の一断面―」（『越中中世史の研究』に所収）の考察が存している。

(27) 大野尼寺については、『金沢市大野町史』の「宗教と文化」の「寺院」に「大野尼寺址」（六九三頁）として、

暦応（一三三八～一三四一）・康永（一三四二～一三四四）年間、河北郡伝燈寺の開山恭翁運良は、ある時大悲像（観音）を画いて、讃辞を書き、これを大野尼寺におさめておいた。ところが、ある日尼寺が火災にかかったが、不思議なことに画像は少しも損傷しなかったので、遠い所でも近い所でも評判になった。その尼寺は臨済宗であったと思われるが、あった場所はまったく不明である。（『加能郷土辞彙』）

と記されているが、わずかに運良との関わりが述べられるのみで、その所在地も加賀大野の地内の何れに存したのかは定かにされていない。ただ、ここでは大野尼寺を運良との関わりから、臨済宗の禅刹であったものと推測している。

(28) 兜率尼寺の位置は明確ではないが、運良の祖塔との関わりからすると、興化寺の北側に隣接して建てられていたらしいことが推測される。運良の示寂後に回禄に逢ったというが、『扶桑五山記』の記載などから、その後も復興されて尼寺として比丘尼や優婆夷を化育し、興化寺叢林の一角を担っていたものと見てよく、おそらくその後は興化寺と命運を共にし、戦国末期までは存続していたことであろう。

(29) 神人とは神と人、神のような容儀のすぐれた立派な人、あるいは真を修め道を得た人、さらには神通力を得た人などの意があるが、ほかに日本では神に奉仕する人すなわち神職に携わる神官・神主などのことも指している。

(30) 示寂直後に門人などにより運良の足跡を簡単にまとめた原初的な「恭翁和尚行状」のごときものが興化寺か伝燈寺に所蔵されていたのであろう。したがって、運良の伝記は三段階で形成されていることになり、原初的にまとめられた伝記史料、それに基づいて法孫比丘がまとめた「行状」や「行実」の内容、さらにその「行状」などを基に建胄がまとめた「塔銘」の記載というものである。ちなみに国泰寺に所蔵される「大日本国賀州路瑞応山伝燈禅寺開山仏林慧日禅師行状」には末尾の「法孫比丘某甲謹状」につづいて「僧魁」の名が記されている。僧魁というのが法孫比丘の名であれば、この行状を撰した禅者が判明することになり、僧魁は運良の法孫であったことになろう。

(31) 『妙光雑記』に載る楚石梵琦の「法燈国師像賛」とはつぎのようなものである。

法燈国師像賛〈同〉。　楚石琦禅師。

禅林龍象、法社狻猊、寿九十九年、世出世間皆敬者在、若仏若祖、天上天下必尊之。凡昼夜坐禅、歴八旬不臥、自呉越帰里、曾寸歩不移。合国崇奉、名山住持。凡聖交参慕其道、王臣趨拝釈其疑。末後一著、向上全提、灰寒火冷、玉転珠回。嘗。是阿誰。無門老人之的子、鷲峯法燈之国師。

日本国鷲峯開山法燈国師遺像。師孫比丘貞遠請賛。　楚石道人梵琦書。

ちなみにここに記される師孫比丘の貞遠とは、応永一二年(一四〇五)六月に孤峰覚明の墓塔である霊照塔下に「故国済三光国師孤峰和尚舎利塔銘有序」を記したことで知られる大綱貞遠と同一人であろう。ただし、この貞遠の嗣承その他については未詳であり、覚心の師孫というだけで、運良あるいは覚明との関わりなどについては明確でない。

(32) 梵琦の伝記は『仏日普照慧辯楚石禅師語録』巻二〇の巻末に所収される「楚石和尚行状」や「仏日普照慧辯禅師塔銘有序」によって知られるが、とくに「楚石和尚行状」によって梵琦が嘉禾の天寧寺に住持していたのは至正一七年(一三五七)から同一九年までと至正二三年(一三六三)から洪武元年(一三六八)までの二期に分かれているが、その後も明の太祖朱元璋(洪武帝、一三二八―一三九八、在位は一三六八―一三九八)の帰依を受けて最晩年まで活躍している。したがって、貞遠が渡航して天寧寺に梵琦を訪ねたのは時期的には梵琦の伝記と合致していることになろう。

(33) 「大機大用、殺活、時に臨む」とあるが、大機大用とは大いなるはたらき、並外れた活作略のことであり、『人天眼目』巻二「臨済宗」に「臨済宗者、大機大用、脱羅篭出窠臼」とあるように臨済宗の活作略を表現することが多い。とくに

大機は宗旨を明らめた境界、大用は学人接化の伎倆をいい、全人格的な力量が全面的に顕現しているありようである。また「殺活、時に臨む」とは禅の機略の妙をいったもので、活かすも殺すも、すなわち学人の境界を肯定するのも否定するのもその時どきに応じて自在であり、把住と放行においてもっとも適切な処置を取ることである。嗔拳とは怒って拳を振り上げることであり、嗔は瞋と同じく顔面に現れた怒り、おもての怒りをいう。また熱喝は夢中になって怒鳴ること、激しく喝することである。これらは何れも運良が臨済禅者としてきわめて厳格な禅風を振ったことを示している。

(34) 遼天の鶻については、たとえば『虚堂和尚語録』巻一〇「秉炬」の「本然侍者」に「抹過両重関、放出遼天鶻」とあり、はるかに高い天空を飛ぶ隼は捉えることができないように、気宇が天にまで達するような勢いをもって捉えどころがないことをいう。また地に踞る獅については、『碧巌録』第八則「翠巌眉毛」の垂示に「有時一句如踞地獅子、有時一句如金剛王宝剣」とあり、地に蹲っている獅子は気力が全身に漲って寄り付くことができないことをいい、勇気が凛々として威風が他を寄せ付けないことに譬えられる。

(35) 玉村竹二氏の『五山禅林宗派図』「法燈派」の箇所には「恭翁運良」の法嗣としてわずかに「絶巌運奇」「蔵海無尽」「桂巌運芳」の三人を挙げるのみである。ただし、無尽を運良の法嗣とするのは明らかな誤りであって、実際には運奇の法嗣であるから運良にとっては法孫に当たっている。

(36) 建仁寺両足院に所蔵される『東山諸派古徳像賛仏事』二には、

絶岩和尚賛。〈諱運奇、嗣恭翁良、良嗣法燈〉　桂岩芳禅師。

奇岩絶岳大巇嶮、万仞峰頭誰得玄。理摩訶衍之條、掃除洞山五位、拠新善光之址、提起法燈三伝。万像側耳、虚空擎拳、打破無門関、大行不伝正令、掀翻仏慧海、宏次未了勝縁。無端将戒定慧三学、偏作漫天網子、向北海路、鯨涛之南、欄空一撒。直得、大光普照包日月、醒風無礙匝坤乾。掲示末後全機、喫茶珍重、拳揚向上的旨、栗棘金圈。宝剣出函光射斗、妙用縦横瞎驢辺、曠劫恩波瀾無底、毘盧蔵海月明天。

絶巌和尚慈相、妙雲寺蔵海長老請讃。　建仁師叔運芳拝書。

とあり、若干ながら字句の異同が見られるが、ほぼ同内容と見てよく、ここでは単に「絶岩和尚賛」として載せられている。

(37) 峨山韶碩のみでなく明峰素哲も五位を参究したものらしく、『明峰仮名法語』の附録には「正偏五位歌」として正偏五位に対する和歌が載せられている。

(38) 『和漢禅刹次第』「日本諸国諸山之禅院」の「北陸道七ヶ国」にも、

同（越中州）長慶寺。護国山、開山絶岩和上、嗣恭翁。

恭翁嗣法灯。

と記されていて、護国山長慶寺が越中の諸山として絶巌運奇の開山になることを伝えている。『新湊市史』の「興化寺とその外護者」によれば、長慶寺が射水郡に存したことは確実であるが、その所在地は定かでない。現在、高岡市に長慶寺町が存しており、その所伝を残しているが、それも移転によってできた地名で室町期の頃と推定されている。『蔭涼軒日録』などの記事から、長慶寺はもと放生津の近くに存したことは察せられるが、一説にいまの新湊市中新湊（江柱）に存する曹洞宗の天啓山長朔寺がもとの長慶寺の寺域であったともされている。ちなみに長朔寺は高岡の瑞龍寺を開いた広

山恕陽（？―一六二三）が開山となっている。

(39) 末後緊要の処とは、ぎりぎりのもっとも重要なところをいう。末後とは最後・究極のこと、ここでは臨終のときをいい、緊要とはもっとも大切なことである。喫茶はお茶を飲むこと、珍重とは別れを告げることば。日常生活のありようが仏法そのものであると示したことになろう。

(40) 広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』「中世における禅宗の展開」の「五山系寺院の隆盛と法燈派の展開」には「長慶寺住持およびその交流者一覧」が載せられており、長慶寺の住僧についての消息を追っている。これによれば、長慶寺に住持した禅者として絶巌運奇につづいて、訢首座・要才梁・真継・商岩佐・円珠照・文苑等章・乾田・蘊秀英珍（瓊林）・彝伯英倫らの名が挙げられている。しかも彼らの多くがその後に興化寺に陞住していることから、長慶寺は興化寺と密接不離の関係で展開していたことが知られる。『妙光雑記』の「十刹位次」には、

護国山長慶禅寺〈同越中州部〉。開山絶岩和尚、嗣二恭翁一、翁嗣二法灯一。諱運奇。両足書入云、心田疏云、訢首座住二長慶一同門。注、令三茲始陞レ位歯二于甲刹一、師第二世、南陽祖塔名。

という記載が存している。ただし、運奇と第二世とされる訢首座では年代的にかなりの開きがあり、両者の嗣法関係などは定かでない。

(41) 聖一派の岐陽方秀（不二道人、一三六一―一四二四）の文集である『不二遺稿』巻上「序」には、

賀二龍雲摠宜寺蔵経頌軸一。

言心声也、書心画也、声画既形、其人之心可レ見焉。西竺聖人、始自二鹿林一至二鶴樹一、三百余会之広也、四十九年之久也。其言洋々不レ可二涯涘一、而其四諦之声、発二乎下智一也、因縁之声、発二乎中智一也、六度之声、発二乎上智一也。三品雖レ殊、究二其聖人之心一、不レ過四於使三人遂到二霊然照然之地一而已。聖人掩光之後、大亀慶喜輩、倶会二畢岩一而編二遺言一、載二之書籍一甚多。充二扨龍伯之宮一、而流二於東一者、僅五千四十八巻焉、則泰山一毫芒爾。其摸二倣於聖人之心一、復猶下如繇画レ龍呉道子画二人物一能逼二乎真一者上也。然則天下後世欲レ見二聖人之心一、弃二其言一撤二其書一、則果何如哉。龍雲摠宜寺、賀州之望也。昔絶岩禅師居レ之、仏既有レ殿、僧亦有レ堂、凡叢林所レ宜レ有者悉備。而法宝之蔵独未レ有、其将レ観二聖人心一者咸病レ之。於レ是住持玉峯璨公、乃為二絶岩貽厥一、纘二其墜緒一、奮然励レ志、選二筆法雄傑者若干人一、書二彼所謂五千四十八巻一、函而蔵レ之、吁勤矣。吾門諸子美玉峯、有レ功二乎吾宗一、或歌以二四韻一、或詠以二絶句一、裒成二一軸一、徵二序於余一。余披而読レ之、則其声琅々然、若三乎金石絲竹、遞奏二於廟堂一也。其文蔚々然、若三乎山龍華蟲、巧絵二於袞衣一也。誠亦可四以発三揮乎西竺聖人心声与二心画一者、而諸子之功、当亦不レ在二玉峯之下一。

応永庚寅冬十月、　　不二境界岐陽方秀叙。

という頌軸が伝えられている。これによれば、運奇は加賀の地内に龍雲総宜寺という禅刹を建てたものらしく、仏殿や僧堂など諸伽藍が完備されていたとされる。この頌軸は総宜寺の住持であった玉峯璨という禅者が運奇の系統を継いで寺内に蔵殿を建立した際、応永一七年（一四一〇）一〇月に方秀が序を寄せたものである。なお、この記事は石川県立図書館史料編纂室の室山孝氏の御指摘によって知り得たことを断っておきたい。

(42) 玉村竹二氏の『五山禅林宗派図』の「法燈派」の箇所には「絶巌運奇」の法嗣として「明室亮聡」のみを挙げ、蔵海無尽については運奇ではなく運良の法嗣として載せている。

(43) 『和漢禅刹次第』「日本諸国諸山之禅院」の「北陸道七ヶ国」にも、

同（加賀）妙雲寺。龍興山、開山蔵海、諱無尽、嗣絶岩。絶岩嗣恭翁、恭翁嗣法灯国師。

と記されており、妙雲寺が諸山に列したことを伝えている。今枝愛眞『中世禅宗史の研究』「中世禅林機構の成立と展開」の「中世禅林の官寺機構」によれば、

妙雲寺は、所在未詳であるが、山号を龍興山といい、開山は法燈派の蔵海無尽である。『蔭涼軒日録』永享十一年十月二十三日の条によると、元賀首座入寺について将軍義教に伺っているから、これ以前に諸山に列していることが知られる。

という考証をなしているが、その所在地が加賀の何れの地に存したのかは不詳とされている。

(44) 広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』「中世における禅宗の展開」の「五山系寺院の隆盛と法燈派の展開」に「五山派寺院としての興化寺」「長慶寺の住持」の項があり、妙雲寺の住僧についても若干の考察が存している。『蔭涼軒日録』の「永享己未（十一年）十月」の条に「廿三日、廬山寺御成。賀州妙雲寺新命元賀首座（中略）各伺之」とあり、首座元賀が妙雲寺への入寺に際して将軍足利義教に謁見している。また『心田播禅師疏』に「梁要才住賀之龍興山妙雲山門へ境致白山」が存し、要才梁という禅者が妙雲寺に住持しており、『幻雲疏藁』「仁方仲住越中興化諸山」によれば、芳中序仁という禅者が妙雲寺住持から延徳元年（一四八九）に興化寺に遷住していることが知られる。

(45) 『鷲峰余韻』「第十章、国師寂後の鷲峰三百年」の「法燈影暗く遺光纔に存す」では無尽が興国寺に住持したことは記されていない。

(46) 商岩佐については註（92）を参照。

(47) このほかに『建仁塔頭次第』の「常照院」には、

当山五十三代祖師、運芳、字桂岩。本州人也。承嗣越中州興化寺開山仏林恵日禅師運良、字恭翁和尚。和尚、鷲峰法燈国師□僧也。永和三年丁巳十二月入滅、室曰天香。

と記されており、また『東山歴代』にも第五三世として、

桂岩運芳。嗣恭翁、翁嗣法灯。常照院開基。桂岩作絶岩賛一首、叢歴金冊ニ見ヘタリ。万寿三十五世。無規矩疏、桂岩住万寿諸山。雪村録中、桂岩芳赴松盖常興之請長詩。琦楚石賛ニ詳ナリ。住妙光賛中ニアリ。又興国ニ住ス、興化ニ住ス、並ニ賛中ニアリ。

として運芳と常照院に関する簡略な足跡を伝えている。ただし、常照院が何時の頃まで存続したのかは記されていない。ちなみに常照の名の由来は、おそらく師の運良の墓塔の存した塔頭である常寂室にちなむものと見られ、運良の「塔銘」に「常照寂爾、曾無盈虧」とあるのと同じ発想であろう。

(48) 梵琦の席下には多くの日本僧が海を越えて来参したことが知られているが、『仏日普照慧辯楚石禅師語録』巻一三と巻一四の「仏祖偈賛」には残念ながら梵琦がなした運芳に対する祖賛はもちろんのこと、すでに触れた覚心と運良に対する祖賛についての記載も見られない。

(49) 明極楚俊の『仏日焔慧明極禅師語録』二巻には、残念ながら運芳に関するような記事は見られない。

(50) 『五山文学新集』第三巻の二七一頁を参照。そこでは「桂岩」に「運芳」と注記している。

(51) 『五山文学新集』第三巻の一一五頁を参照。このほかに『大智禅師偈頌』にも「桂岩」という道号頌が載せられており、運芳が明峰素哲の高弟である大智（一二九〇―一三六六）と関わりを持った可能性も存している。

(52) 「桂岩芳禅師賛」に「与無隠□分風月」と記される文意は定かでないが、あるいは運芳が京都禅林で研鑽中に幻住派の無隠元晦（法雲普済禅師、？―一三五八）と交友を結んだことが存したのであろうか。

(53) 白石芳瑠「法燈国師について」（『日本学士院紀要』第六巻第一号に所収）に付録される「妙光寺歴住補稿」によれば、『東山塔頭記』の順位と今津洪岳撰『現妙光寺過去帳』の説を合わせて妙光寺の世代が記され、これに白石氏自身による若干の考察が付されているが、智訥・運芳・禅慧・明麟については、

7古剣智訥　×三光　雲樹2　大雄2　正平廿二年住山
仏心慧燈国師
七8桂岩運芳　×恭翁　建仁53　永和二・十二・十五　▽
〔像賛、妙光雑記〕
八9海雲禅慧　×高山　霊洞2　至徳二・六・八▽〔高山塔銘、東海一漚集、正眼智鑑年譜〕
九　聖徒明麟　×三光　住興国　南禅83　応永卅・八・七
▽〔曇仲疏、絶海録、空華集一八、満済准后日記、空谷録〕

と記されている。当時、覚心の法孫が順次に住持を勤め、京都における法燈派の一大拠点となっていたことが知られる。

(54) 『和漢禅刹次第』「日本諸国諸山之禅院」の「山陽道八ヶ国〈備後〉」にも、

成興寺、松蓋山。開山無伴和上、諱智洞。嗣二法灯国師一。在二松隈荘一。

と記されている。今枝愛眞『中世禅宗史の研究』「中世禅林機構の成立と展開」の「中世禅林の官寺機構」によれば、常興寺は、もと松隈荘にあったが、現在は廃寺である。山号を松蓋山といい、開山は法燈派の無伴智洞である。『東海一漚集』二によると、海雲慧首座入寺の疏があるから、作者の中岩（円月）が寂した永和元年正月八日以前に諸山に列していることがしられる。

という考証が存しているが、すでに廃寺となっているため所在地や伽藍の変遷などは定かでない。

(55) 『五山文学新集』別巻一の五三二頁を参照。

(56) 『五山文学新集』第三巻の八〇一頁から八〇二頁を参照。

(57) この長篇によれば、友梅は建武四年（一三三七）の仲春に播磨（兵庫県）赤穂郡苔縄の寓々軒に居していることが知られるが、その伝記史料である「勅諡宝覚真空禅師前住大唐京兆翠微寺後住日本京城東山建仁禅寺雪村大和尚行道記」によれば、この年に友梅は播磨守護の赤松則村（月潭円心居士、一二七七―一三五〇）の請を受けて苔縄の金華山法雲禅寺の開山に迎えられている。

(58) 『五山文学新集』第三巻の七六〇頁を参照。そこでは「松蓋長老」を「常興寺」の「桂岩運芳」と注記している。

(59) 『鷲峰余光』「第十章、国師寂後の鷲峰三百年」には「法燈影暗く遺光纔に存す」という項があるが、興国寺に住持した禅者については明確でない。一応、住持であった人として、嫩桂正栄（大医禅師、一二六六―一三五三）・高山慈照（広済禅師、一二六六―一三四三）・東海竺源（法光安威禅師、一二七〇―一三四四）・無住思賢・孤山至遠（広照禅師、一二七八―一三六六）・孤峰覚明・歇堂・在庵普在（仏恵広慈禅師、一二九八―一三七六）・大歇勇健（正眼智鑑禅師、一三三一―一三八三、第三七世）・信中自敬（一心）・聖徒明麟などが住持していることが知られるが、その世代や住持期間などはほとんど判明しない。ただ、さらに諸史料から、東海竺源が第五世であり、辯翁智訥が第一〇世であったこと、自南聖薫が第三九世として南朝の元中元年（一三八

四）に住持していること、仲立一鶚が第四四世であったときに十刹位に列して北朝の康応元年（一三八九）一二月に公帖を得て入院していること、松岡秀が第四五世、無白玄が第四六世となっていることなどが知られるから、覚心が示寂して後わずか一世紀足らずで五〇代もの住持が交代していることになり、中世の興国寺ではほぼ二年交代ほどで輪住制が敷かれていたのではないかと推測される。

(60) 運芳の前後に万寿寺に住持した禅者についてその消息を窺ってみるに、『五山住持譜』「万寿禅寺歴代」には、

三十二、龍泉令淬、嗣二虎関錬一。三十三、蘭州良芳。三十四、実田元頴、嗣二約翁倹一、応安四年辛亥四月廿日寂。三十五、桂岩運芳、（中略）。三十六、梅峰徳英、嗣二無象照一。三十七、南海宝洲、永徳三年十一月廿九日寂。

と記されている。『龍泉和尚語録』「住万寿寺法語」などによれば、聖一派の龍泉令淬（？―一三六五）が貞治三年（一三六四）八月二八日に第三二世として入寺し、翌年の一二月一一日に海蔵院で示寂している。また第三三世は一山派の蘭州良芳（弘宗定智禅師、一三〇五―一三八四）であり、「弘宗定智禅師行状」によれば、

貞治二年癸卯、師五十九歳、住二相陽万寿一。四年乙巳、師六十一歳、住二輦下万寿一。永和四年戊午、師七十四歳、尸二東山建仁一。（中略）康暦二年庚申、師七十六歳、捧二勅黄一莅二南禅一。

と記されるから、貞治四年に万寿寺に住持していることが知られる。さらに『愚管記』（『後深心院関白記』とも）の「貞治六年丁未歳正月」によれば、

廿日丁未、晴。万寿寺長老元頴来、余相看白麻三十帖与之、自然之会釈也。

とあり、貞治六年（一三六七）正月三〇日に関白の近衛道嗣（後深心院、一三三二―一三八七）が万寿寺に白麻三帖を与えているが、そのときの住持は第三四世であった大覚派の実田元頴であったことが知られる。一方、聖一派の南海宝州（一三二二―一三八三、または一三二三―一三八四）が第三七世に入寺したのは「正統下南海和尚伝」に「四十七而領二京師万寿公牒一、五十四住二東福一」とあるから、応安元年（一三六八）かその翌年のことと見られる。したがって、第三六世の法海派の梅峯徳英の消息は定かでないものの、第三五世の運芳が万寿寺に住持したのは貞治六年の正月以降より応安元年の頃に至る足掛け二年ほどに限られることになろう。

(61) 『五山文学新集』第三巻の一五一頁を参照。

(62) 『義堂和尚語録』巻一「住京城東山建仁禅寺語録」は、

師以二康暦二年庚申二月十九日一、在二相陽報恩禅寺一、受二右府請一、四月四日入寺。

とあり、周信が康暦二年（一三八〇）四月四日に建仁寺に入寺していることが知られる。

(63) 建仁寺の霊洞院については、『和漢禅刹次第』「東山建仁寺」の「諸塔」にも、

由良派、霊洞院。高山和上、諱慈照、旧妙源。嗣二法灯一。洛陽人、姓菅氏。貞和二、十二月廿五日寂。諡二広済禅師一。

と記されており、高山慈照によって開かれた由良派の拠点であったことが知られ、名の由来は無門慧開が開山住持した杭州（浙江省）銭塘県の霊洞山護国仁王禅寺にちなむのであろう。『東山塔頭略伝』の「霊洞院」の項には、

霊洞院。開基広済禅師。

師諱慈照、号二高山一。京師人。嗣二法燈国師一。歴二住和泉州法香山・洛之妙光・紀伊州大慈・楞厳・報恩・長楽・興国一、又奉二命住二京都万寿一〈第十四世〉、尋遷二建仁一〈第廿六世〉。貞和二年丙戌十二月廿五日示二寂于楞厳一。延文三年戊

戌、敕二諡広済禅師一。師徒海雲禅慧等、勠力創二塔院於建仁一、曰二霊洞一、塔扁二再来一。初在二山之南偏宮辻一、至二永和中一、特有レ旨移二今地一。興国塔所亦曰二霊洞菴一、紀伊州大雄・亀山、和泉州興禅・海蔵、山城州延福・福成、河内州宝寿、並為二開祖一。楚石琦禅師、撰二塔銘一、周伯琦書并篆額。扶桑僧宝伝・延宝伝燈録・本朝高僧伝有レ伝。

とあり慈照とそのゆかりの霊洞院の変遷が知られる。また慈照の塔銘を楚石梵琦が撰しているのも注目される。

(64) 越中の興化寺や長慶寺などから運良の門流（仏林派）の禅者が常照院に輪次した消息については、『新湊市史』「中世」の「興化寺とその住持たち」を参照。

(65) 『東山歴代』より運良の系統で建仁寺の世代に名を連ねている禅者を挙げるなら、

・（二百三）文苑等章。嗣二仲方円伊一、伊嗣二南嶺子越一、越嗣二約翁一。長慶院〈越中長慶寺ト混雑シテ誤ル也〉。公文帳南禅部、仲方円伊。如是雑説疏伝本ニ、文苑住二越中興化一山門諸山同門疏アリ、法燈派ト見ユ。同人カ可レ考。九淵横川ノ作也、時代ハ同シ、又東山ノ人ト見ユ。天隠疏、仲方伊住二越中興化長慶一「　」江湖、法燈派ト見ユ。横川小補集ニ諸山疏アリ。

・（二百六）自成秀瑛。長柄帯四ニ同慶字銘曰、越上興化之徒秀延侍者、今華蔵自成翁爪抹之子、云々。翁之南禅帖下、云々。公文帳南禅部、有二自成秀瑛一。蓋法灯派運良ノ下乎。天隠疏。

・二百六十、彝伯英倫。法灯派恭翁運良之孫。按常照院乎。永禄十二年、林等西堂住二越中興化寺一法語、拈レ衣曰、吾仏林祖翁、云々。嗣香曰、供二養前住建仁彝伯大和尚一、云々。公文帳、永正八年辛未二月十九日、彝伯越中長慶、又越中興化部彝伯。

となり、同じく『東山歴代』の「受二建仁帖一不レ入二世数一之人〈不レ詳二其前後一〉」には、

・等仲光倫。法灯派乎。桂林録、等仲西堂〈云克続二法灯余焔一、云々〉。公文帳妙光部、有二等仲光倫一。年中行事ニ、等仲西堂設洛、蓋常照派ナラン。越中末寺ニ光ノ字ヲ用。

・商岩佐。流水集、住二長慶一諸山疏。九淵疏、住二興化一諸山、又住二長慶一諸山。越雪集、商岩住二興化一山門。

・瓊林珍。越中長慶寺ニ住スル疏、桂林疏ニ見ユ、又興化疏。

・要才興。流水集、住二興化一山門。心田疏、住二妙雲一山門。

・円珠照。流水集、住二長慶一山門。越雪、円珠住二興化一山門。

として世代に入っていない仏林派と見られる禅者についても数名を挙げている。

(66) 薬勝寺の変遷と世代については、砺波郷土資料館の佐伯安一氏が平成五年（一九九三）に執筆刊行した『薬勝寺誌』が存しており、「薬勝寺の開基と開山」「淳良親王伝説」「薬勝寺の歴代」および「般若野荘と薬勝寺」などの考察がなされている。このほかに『砺波市史・資料編4』の「民俗・社寺」の「Ⅲ寺院〈般若地区〉」にも「般若山薬勝寺」として考証が存している。

(67) 『薬勝寺誌』の「薬勝寺の開基と開山」によれば、開山の運芳と薬勝寺の関わりについて、

ところで薬勝寺に関しては、招請開山であるためその時はこの地を踏んでいない。したがって当寺の開創に直接関わったのは二世玉岩（前住加賀伝燈寺）ということになろう。その招請のシンボルとして請来したのが桂岩運芳の開山像である。

とあり、運芳は実際に開山として薬勝寺に入院したのではな

く、招請開山として法嗣の周光によって迎えられたものと解されている。また、従来、薬勝寺の外護開基は増山城主の神保良衡（左近之進）と伝承されてきたが、越中で神保氏が守護代として活動する時期などから疑義を呈して検討を要する課題としている。

(68) 『薬勝寺誌』の「文化財と史跡」によれば、薬勝寺にまつられる「開山桂岩運芳坐像」について、

当寺の招請開山桂岩運芳の頂相である。材質は桧。曲彖（椅子）に坐し、全身に漆をおき、衣文には剥落しているが朱胡粉の彩色を施した痕跡がある。高さ五七センチ。玉眼入りの真に迫る風貌で、禅僧としてのきびしい人格が如実に表現されている。類型化せず個性的表現にすぐれている点、また、眉から頬にかけてのそいだような面取りの彫法から推して、南北朝末か室町時代初期の作である。桂岩師は南北朝時代の延文四年（一三五九）、京都の建仁寺より招請されて当寺の開山となられた方で、永和三年（一三七七）十二月十五日寂。仏照禅師と勅諡されている。本像は昭和四十三年七月二十四日、砺波市の文化財に指定された。（『砺波市の文化財』）

と記されており、運芳が生前中か示寂した直後に刻まれた木造坐像であることが推定されている。

(69) 『薬勝寺誌』「文書史料」に載る文化三年（一八〇六）三月に薬勝寺が本山の国泰寺に提出した「般若山薬勝寺由来」によると、

同延文申年、増山城主、従二京都建仁寺一勅諡仏照禅師御請待在レ之、被レ致二住職一。

とあり、また薬勝寺の運芳の木造の正面に置かれる位牌にも「開山勅諡仏照禅師桂岩運芳大和尚」と同様に記されていることから、運芳が示寂して後に仏照禅師という勅諡号を朝廷より賜っていることが知られる。

(70) 『薬勝寺誌』の「薬勝寺の歴代」によれば、わずかに第二世の周光について忌日を応永一一年（一四〇四）八月一四日とし、備考として「前伝燈寺」と記しており、

二世玉岩周光は前伝燈寺とある。伝燈寺は金沢にあり、桂岩の師恭翁運良の開創になる法燈派の寺である。

と説明するのみで、その嗣承などについては明確にしていない。

(71) 国泰寺に所蔵される『法燈下清泉派法継図』や『国泰歴代法脈経図』などによれば、祖広は国泰寺の慈雲妙意の系統に連なる北嶺雲祥の法を嗣いだ禅者とされており、妙意を第一代とすると法系で第一〇代に当たっている。先の「薬勝寺の歴代」によれば、祖広については忌日を明応六年（一四九七）一〇月二〇日とし、備考として「前国泰寺二十世」と記しており、淳良親王（後花園天皇の皇子か）の伝説や光厳寺の『光厳東海和尚録』などとの関わりを論じた後、

ところで少し気になるのは、この没年が、前住二世玉岩の没年応永十一年（一四〇三）よりも九十四年も経ていることである。無住の時期があったのであろうか。それはともかく、この文坡は前国泰寺二十世で、以後十三世澄月僧精（前国泰寺三十世）まで十一世にわたって国泰寺歴代の隠居寺になっていた。

という考証をなしており、長期にわたる無住期間の存在や文坡祖広に始まる国泰寺との関わりなどが指摘されている。

(72) 『薬勝寺誌』の「宝念寺のこと」および『砺波市史資料編4』「民俗・社寺」の「Ⅲ寺院〈般若地区〉」には末寺である徳万の宝念寺についてその変遷と世代が載せられている。

(73) 『薬勝寺誌』「文書史料」に載る文化三年（一八〇六）三月に薬勝寺が本山国泰寺に提出した「般若山薬勝寺由来」に

よると、

(前略)同延文申年、増山城主、従二京都建仁寺一勅諡仏照禅師御請待在レ之、被レ致二住職一。数ヶ之庄園御寄附、夫より禅宗ニ罷成り、般若山薬勝禅寺与号シ、七堂伽藍御建立御座候処、(中略)其節末寺徳万村宝念寺、安川村透関寺・普門寺より止関寺、都合五ヶ寺、則文坡和尚之代建立被二仰付一。(後略)

とあり、徳万村の宝念寺のほかにも安川村の透関寺・普門寺・止関寺も祖広の代に建立されたと伝えられている。おそらく透関寺・普門寺・止関寺などは薬勝寺の塔頭寺院として近隣にあって機能していたのであろう。

(74) 玉村竹二氏の『五山禅林宗派図』の「法燈派」の箇所には「桂巌運芳」の法嗣として「岳雲」のみを挙げている。

(75) 白石芳瑠「法燈国師について」に付録される「妙光寺歴世補稿」によれば、運良の系統では、わずかに桂岩運芳と岳雲の二人しか妙光寺に住院していない。

(76) 『五山文学新集』別巻二の一三五頁を参照。

(77) 『五山文学新集』別巻一の五三三頁を参照。玉村竹二氏はその解題の末尾に付した「乾峰士曇関連宗派図」において、運芳の法嗣として「善従」の名を記している。

(78) 越中守護の名越時有と蓮華寺の関わりについて、広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』「中世における禅宗の展開」の「恭翁門下の発展」において、

(蓮華寺所蔵の)「過去留帳」によると、はじめ、名越時有の外護により射水郡大門(高岡市蓮花寺)に建立され、その後、神保氏の援助を受けて富山市上飯野に移転、ついで神保長住の保護を受けて婦中町長沢に移転し、佐々成政によって富山に移ってきたというのである。

と述べながらも、移転の過程については疑問を呈している。

(79) 蓮華寺は伝燈寺の末寺のごとく見られているが、『妙光雑記』には蓮華寺について、

妙光寺末寺。
一、諸山。備後州松盖山成興寺。
一、同。同、護国山善昌寺。
一、同、金宝寺。
一、同、香刹菴。
一、山城州宇治、三明寺。
一、越中州〈富山太平山〉、興国寺。
一、同、蓮華寺。
一、同、太平寺。
右各寺末派之証、旧記有之候。
天明六年丙午臘月、妙光寺。
〈右寺社所江出〉。

と記されている。これによれば、古くより天明六年(一七八六)に至るまで蓮華寺は京都の妙光寺の末寺のごとく位置づけられていたらしいことも知られる。現在では蓮華寺は同じ富山の太平山興国寺とともに国泰寺派に属している。

(80) 蓮華寺の歴住については多少は煩瑣にわたるが、蓮華寺住職の水口大倫師より記して戴いた蓮華寺の「過去留帳」に基づく歴住世代を列記しておくことにしたい。

開山瑞応敕諡仏心円成禅師、呑象運光大和尚。観応二年十月七日。
前瑞応当寺二世久安開山、敕諡慈照禅師天外運義大和尚。応安四年七月十六日遷化。
前瑞応当寺三世国分開山、敕諡大陽禅師蒙菴運聡大和尚。応永九年九月十八日。
前瑞応当寺四世花岳白英大和尚禅師。応永十九年五月六日。

前瑞応当寺五世天海充柱大和尚禅師。文安八年一月九日。
前瑞応当寺六世龍門一登大和尚禅師。文正元年二月九日。
前瑞応当寺七世月船義江大和尚禅師。延徳八年三月七日。
前瑞応当寺八世齢山素椿大和尚禅師。文亀元年一月八日。
前瑞応当寺九世太伯友梅大和尚禅師。永正八年十月十八日。
前瑞応当寺十世映林令雪大和尚禅師。大永八年六月十八日。
前瑞応当寺十一世碧天晴雲大和尚禅師。享禄三年九月二日。
前瑞応当寺十二世文裔祖鳳大和尚禅師。天文十一年五月二十六日。
前瑞応当寺十三世逸峰存俊大和尚禅師。弘治元年七月九日。
前瑞応当寺十四世明隠仙亮大和尚禅師。永禄十一年嘉月二十二日。
前瑞応当寺十五世嘯山林虎大和尚禅師。天正十二年四月十三日。
前瑞応当寺十六世三省元祐大和尚禅師。慶長元年嘉月十六日。
前瑞応当寺十七世芳国智聯大和尚禅師。慶長十五年極月三日。
前瑞応当寺十八世雲谷禅龍大和尚禅師。元和五年三月二十一日。
前国泰当寺十九世祝峰恵領大和尚禅師。寛永十一年二月二十五日。
前国泰当寺二十世継室僧胤大和尚禅師。正保四年一月十二日。
前国泰当寺二十一世運室玄氏大和尚禅師。万□八年五月八日。
前国泰当寺二十二世伝外性単大和尚禅師。延宝七年五月十日。
前国泰当寺二十三世雲嶺不徹大和尚禅師。元禄八年六月二十九日。
前国泰当寺二十四世定天顕恵大和尚禅師。元禄十四年嘉月二十二日。
前瑞応当寺二十五世照雪覚用大和尚禅師。正徳元年四月二十四日。
前国泰当寺二十六世陽山義晃大和尚禅師。享保六年三月望日。
前国泰当寺二十七世閩州玄沙大和尚禅師。宝暦五年十月十七日。中興・本堂再建。
前国泰当寺二十八世天齢玄柱大和尚禅師。天明三年二月二十二日。
前久安当寺二十九世寛道玄恵西堂禅師。寛政元年四月二十六日。
前国泰当寺三十世盤谷和尚大禅師。文化九年四月二十一日。
前住当寺三十一世観海西堂眼和尚禅師。文政四年三月十九日。
前住当寺三十二世太陽祖省西堂和尚禅師。元治元年四月十三日。
前住当寺三十三世雪渓不白西堂和尚禅師。明治元年十二月十七日。
前住当寺三十四世龍雲宗玉和尚禅師。天保十四年七月二十六日。
前住当寺三十五世啓林碩文西堂和尚禅師。安政五年九月十二日。

再中興前住当寺三十六世仏母宜寛西堂大和尚禅師。明治二十八年九月十六日。
前住国泰当寺三十七世月泉文悦和尚禅師。大正元年十二月三十一日。
前住国泰当寺三十八世碩応文誠和尚大禅師。昭和十八年三月十一日。
前住国泰当寺三十九世香琳玄機和尚大禅師。(現東堂)
現住四十世大倫。俗姓水口。

これによれば、少なくとも第一八世の雲谷禅龍(?―一六一九)までは運良の系統である仏林派の禅者が蓮華寺を維持し、伝燈寺と密接な関わりをもって展開していたことが知られる。

(81) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』「縁起・伝承・地誌」によれば、ほかに伝燈寺の石地蔵と綱存との関わりを伝えるものとして、『加能越金砂子』「加賀国河北郡」の「伝燈寺」の箇所、『加賀志徴』巻一二「河北郡小坂郷」の「伝燈寺石地蔵」の項などが存しており、とくに『加賀志徴』では「地蔵応験新記」によるとして、

伝説に云、右山賊は名を悪四郎と云、仏林恵日禅師の弟子と成り、至庵と称す。一寺を建立し、禅栖院と云ふ。是伝燈寺二十一ヶ寺塔頭の一ヶ寺にて、後に金沢へ出づ、野田寺町禅栖院、是也。

と記されている。これによれば、山賊の悪四郎が運良の弟子となって至庵と称したこと、彼が伝燈寺の一角に禅栖院を建立したこと、伝燈寺には二一ヶ寺もの塔頭が存したことなどが記されている。

(82) 江戸初期には伝燈寺の塔頭は華蔵院・宝性庵・禅栖院の三ヶ寺を残すのみとなっていたものらしく、禅栖院は前田利家の治下に金沢の小立野に転出している。まもなく禅栖院は河原町に移り、さらに元和元年(一六一五)には泉野寺町に落ち着いているが、その後、荒廃してか明治初期には廃寺となっており、すでに伽藍は残されていない。

(83) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「伝燈寺世代表」によれば、

延文二年丁酉、二世至庵綱存、十月七日寂。天文十四年、勅諡円通仏眼禅師。

とあり、綱存が延文二年一〇月七日に示寂し、その後、天文一四年(一五四五)に至って円通仏眼禅師の勅諡号を賜っていることが知られる。

(84) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』「文献史料」の「国泰寺所蔵史料」に「蔵人頭勧修寺晴秀奉口宣案」が収められ、口絵に写真が載せられている。ちなみに国泰寺に所蔵される『国泰歴代法脈経図』によれば、第二七世の雪庭祝陽(?―一五〇五)の箇所に「勅諡仏眼禅師」と記されており、綱存と祝陽の混乱が見られる。これについて、久保尚文『越中中世史の研究』「越中禅宗史の断片」の「国泰寺の再興など」には、

この「法脈経図」にみられるように、前掲口宣案で綱存和尚に諡られていた「仏眼」禅師の号は、二十七代住職雪庭祝陽の号として記入されている。では綱存と雪庭とは同一人物なのであろうか。そんなことは考えられない。実は国泰寺に現蔵されている前掲天文十四年の綱存和尚諡号に関わる口宣案は、元来加賀伝燈寺文書として伝存されてきたものと考えられる。それが近世の何時かの時点で国泰寺に移管されたものと思われるのである。右口宣案は『松雲公採集遺編類纂』においては「伝燈寺文書」として掲げられているから、移管は『松雲公採集遺編類纂』のための史料調査以後の段階で発生しているのであろうか。そして国泰

寺では早くも安永年代以前にこの口宣案を国泰寺文書と混同し、系図上の雪庭に仏眼禅師の注記を加えるに至ったものと考えられる。

という考証が存しており、この口宣案が国泰寺に移管されて混乱していった過程を推測している。

(85) 「開山仏眼禅師之塔」についても、『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「石造遺物」に無縫塔として運良の墓塔とともに考証が存しており、「仏眼禅師塔実測図」なども載せられている。

(86) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「伝燈寺世代表」によれば、

応安四年辛亥、三世無外運義、七月七日寂。（年不詳）諡慈照禅師。前瑞応蓮華寺二世。

と記されており、道号が天外ではなく無外となっているが、応安四年（一三七一）七月七日に運義が示寂していることを伝えている。

(87) 久安寺については定かでないが、運義は伝燈寺第三世であるとともに越中蓮華寺の第二世であり、さらに久安寺の開山となっていることから、おそらく蓮華寺の近隣に建立された末寺であったものと見られる。しかも「蓮華寺過去帳」によれば世代のひとりに、

前久安当寺二十九世寛道玄恵西堂禅師。寛政元年四月二十六日。

とあるから、少なくとも蓮華寺第二九世の寛道玄恵（？―一七八九）が久安寺に住持していたことが知られ、この寺が江戸中期までは存続していたらしいことが判明する。

(88) 越中の国分寺については、角田文衛編『国分寺の研究』に堀井三友「越中国分寺」の考証が存している。それによれば、越中の国分寺は射水郡一宮村に存したが、いまは一宮村字国分堂に薬師堂が残るのみであるとされる。ただし、この寺が運聡が開山となった禅刹の国分寺と如何なる関わりがあるのかは定かでない。

(89) 伝燈寺の変遷については『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「第九章、伝燈寺の歴史」に「中世の伝燈寺」「近世の伝燈寺」「近代の伝燈寺」として考察が存している。

(90) 一山派の天隠龍沢（黙雲、一四二二―一五〇〇）の詩文集である異本『黙雲稿』に、

前住伝燈寺笑雲闍首座肖像。

気岸磊磊、量陂汪汪、住花蔵拓開十界、居板首坐断両堂。手中竹篦、鋳一団鉄、眉間宝剣、吹三尺霜。伝法燈而燈燈相続、賓慧日而日日増光、六十四年雷奔電巻、百千三昧地老天荒。咦。深山大沢龍蛇窟、今日興家有此郎。

という伝燈寺第一四世の笑堂祖闍（笑雲とも、一四〇五―一四六八）の肖像に記した賛語が残されている。これによれば、祖闍は首座位であったことが知られ、はじめに伝燈寺の子院である華蔵院に住持し、さらに伝燈寺に化導を敷いて運良（仏林慧日）の法門を振るって六四年の生涯を終えたことが称えられている。また同じくつづいて

前住伝燈寺乾英曇禅師肖像〈鷲峯・普明・金剛・長楽有機縁〉。

面如秋月出雲、高下斉照、心似春雨潤物、枯槁発生。蚤登龍門、知波瀾無二、直承鷲峯、呑雲夢以并。於普明古仏受懸記、与釈迦老子同其名。雨吹撃演、今徴六瑞之事、伝広続聯、重増五燈之明、無端喚起金剛定、長楽暁鐘花外声。

という伝燈寺第一六世の乾英曇（？―一四八一）の肖像に記した賛語も伝えられている。これによれば、乾英曇は鷲峯す

なわち由良の興国寺に出世してか、伝燈寺の子院であった普明庵・金剛院さらに長楽寺（不明）などを歴住し、伝燈寺に陞住していることが知られる。ともに『五山文学新集』第五巻の九五四頁を参照。

(91) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「文献史料」の「興国寺所蔵史料」に「伝燈寺奉行宗廉証状」として載せられている。

(92) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「口絵写真70」と「文献史料」の「伝燈寺所蔵史料」によれば、後柏原天皇の綸旨の内容は、

当寺事、為二勅願寺一、来際可レ奉レ祈二宝祚延長一者。天気如レ此、悉レ之以状。

永正十二年五月二日、　左中辨。（花押）

伝燈寺住持。

というものであり、これに左中辨の広橋守光（是称院祐寂、一四七一―一五二六）の添状が付されている。その経緯は『守光日記』の永正一二年（一五一五）五月二日と同八日の条によっても確かめられる。ちなみに『曹洞宗古文書』の「大乗寺文書」によれば、大乗寺もまた永正一四年六月三日に後柏原天皇の綸旨によって勅願寺となっており、その前日には将軍の足利義稙により寺領や屋敷が安堵されている。

(93) 伝燈寺の塔頭子院については、拙稿「恭翁運良の活動と曹洞宗（中）―加賀大乗寺と瑩山紹瑾を踏まえて―」（『駒澤大学仏教学部論集』第二九号）の註（63）においてすでに触れている。

(94) 『加賀伝燈寺―歴史資料調査報告―』の「伝燈寺の歴史」に「富樫晴貞と伝燈寺」として簡略な考証が存している。

(95) 興化寺住持者については『新湊市史』「中世」に「興化寺とその住持たち」および広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』「五山系禅院の隆盛と法燈派の展開」の「興化寺住持および その交流者一覧」に考察が存する。それらによれば、興化寺に住持した禅者として恭翁運良につづいて、義仲・商岩佐・円珠照・英昭・亮天・瑞旭・英護・文苑等章・要才梁・芳中序仁（方中）・蘊秀英珍（瓊林）・自成秀瑛・彝伯英倫・雪渓・林等といった人々を挙げている。夢窓派の心田清播（春耕、一三七五―一四四七）の『心田播禅師疏』「同門」には「訴首座住二越中長慶一〈今茲始陞レ位、鹵二于甲利一、師第二世也、南陽祖塔名〉」が存している。夢窓派の東沼周巖（留月道人、一三九一―一四六二）の『流水集』二「疏」には「梁要才住二越之興化一」が存し、夢窓派の瑞渓周鳳の『瑞渓疏』「諸山」にも「要才梁西堂住二黄龍山興化一諸山」が存していることから、要才梁は長慶寺で修行して首座となり、加賀の妙雲寺に住持して後に興化寺に入院していることが知られる。また『流水集』二「疏」には「佐商岩住二越之長慶一」が存しており、とくに「佐商岩住二越之長慶一」には「蔵海掲二示毘盧印一、栲栳傾二出円明珠一」とある。この点は曹洞宗宏智派の元芳正楞の『越雪集』「山門」にも「商岩住二越中興化一」が存し、その中でも「呑二華蔵海一、全非二蠡測之知一、透二無門関一、豈假二鶏鳴之技一」と記されているから、商岩佐は蔵海無尽の法を嗣いで長慶寺と興化寺に住持したのではないかと推測される。さらに『流水集』二「疏」には「照円珠住二越之長慶一」が存し、『越雪集』「山門」にも「円珠住二越中興化一」が存しており、「円珠住二越中興化一」の中で「東山雲仍、珥二金貂於七葉一、南陽風烈、揮二白羽於三軍一」と記されているが、円珠照は東山七葉の系統から訴首座（南陽）を経由して嗣承し、長慶寺や興化寺に住持しているものと推測される。このほか『越雪集』「同門」には「義仲住二越中興化一」も存している。また一山派の天隠龍沢（黙雲、一四二三―一五〇

○）の『黙雲集』「諸山」には「瑛自成住二越中興化一」があり、「江湖」にも「章文苑住二越中興化護国一」が存し、夢窓派の横川景三（補庵・万年村僧、一四二九―一四九三）の『蒼蔔集』にも「文苑住二越黄龍一諸山〈諱章〉」が存しているから、文苑等章や自成秀瑛も運良の門流として長慶寺や興化寺に住持しているものらしい。

(96) 『新湊市史』「中世」に「興化寺とその住持たち」として「開基と運良伝」「室町時代の住持たち」「興化寺の詩僧たち」「応仁の乱と住持たち」「戦国末期の興化寺」「興化寺とその外護者」の考察が存している。また、その内容を受けて広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』「中世における禅宗の展開」の「五山系寺院の隆盛と法燈派の展開」には「興化寺住持およびその交流者一覧」が載せられており、興化寺の住僧について考察している。ちなみに先の「興化寺とその外護者」には、運良が興化寺を開く因縁となった十文字河に関する『越中志徴』巻四「射水郡」の「十文字河」の記事を挙げている。『景徐日渉記』の「明応八年四月二日」の条に、

越中興化寺、則由良之嗣運良之所レ開也。運良受二師之讖記一、而入二北国一。遂至二越中一而開二興化寺一也。師之讖曰、後在逢二十字河一則住焉。偶入二越中一、則童子喚二十文字河之名一、知レ合二其讖記一、而住レ此。云々。

という記事が存しており、『越中志徴』ではこの十文字河について、

按ずるに、十文字河或は十字河とも載せたれば、辻河なるべし。和名抄、道路類に、十字、呉均行路難云、縦横十字成二阡陌一。今按、十字者、東西南北相分之道、其中央似二十字一也、俗用二辻字一。本文末レ詳、とあり。或云、辻の字は、十之二字を辻となして、一字の如く書きなせるものなり。故に辻に作るは非なりといへり。

という注記をなしており、十字の意味を考察している。

〔付記〕本稿を執筆するのに際して、金沢市伝燈寺の御住職宮崎元良老師、高岡市国泰寺派管長の沢大道老師より資料の提供や御助言をいただいた。ここに記して御礼申上げたい。